

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書 第26集

かわ ばた  
**川 端 遺 跡**

都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書 IV

2018

長崎県教育委員会

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書 第26集

かわ ばた  
**川 端 遺 跡**

都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書 IV

2018

長崎県教育委員会



写真 1 川端遺跡遠景（南から都市計画道路池田沖田線沿線を望む）



写真 2 川端遺跡遠景（東から大村湾を望む）

巻頭図版 2



写真3 川端遺跡A区鉛直（包含層検出状況）



写真 4 川端遺跡 B 区鉛直（包含層検出状況）

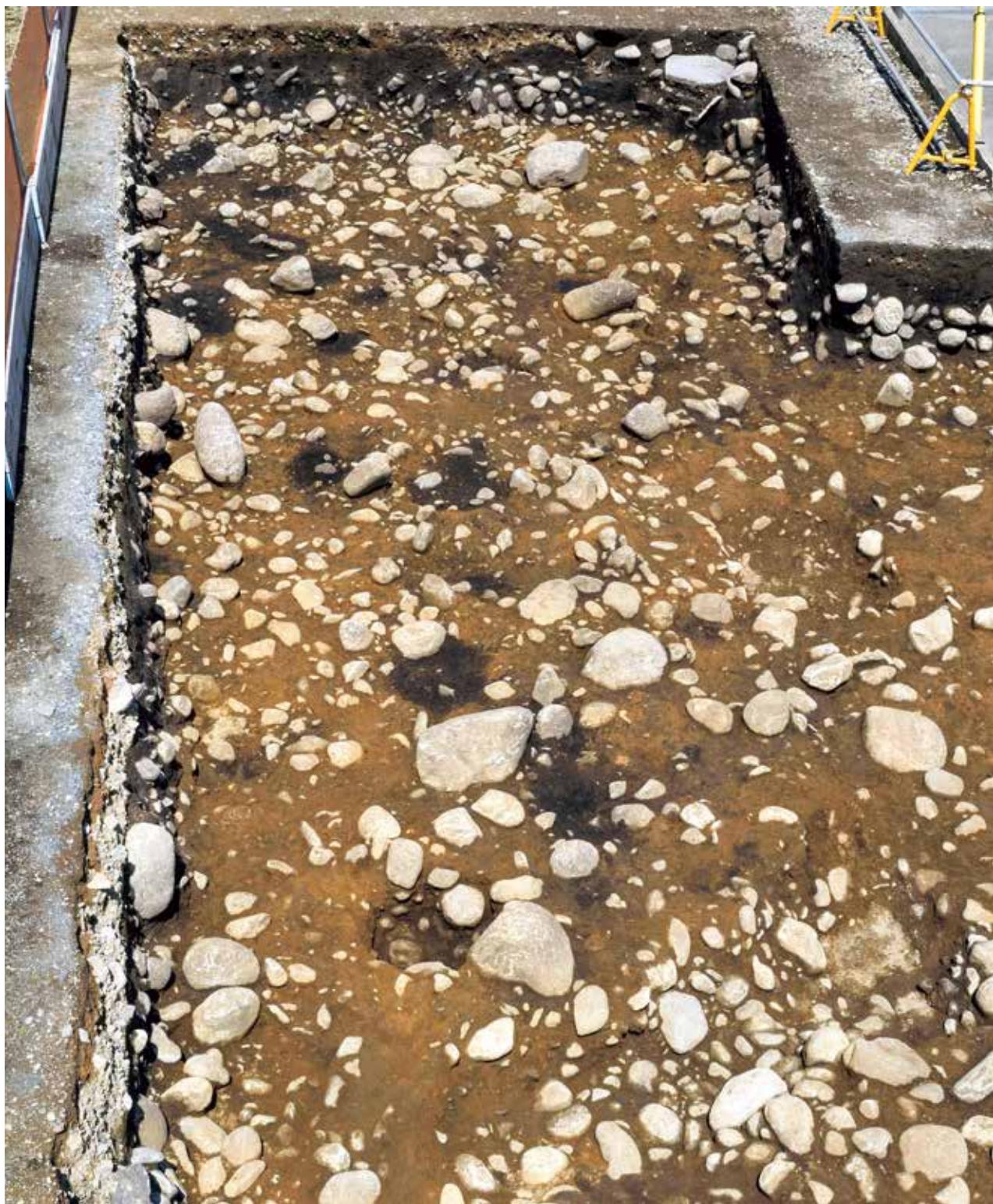


写真 5 SB01 検出状況



写真 6 SB01 完掘状況



写真 7 SP54 遺物検出状況



写真 8 川端遺跡出土遺物群

## 刊行にあたって

本書は、都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴い、平成 29 年度（2017）に実施した川端遺跡の発掘調査報告書です。

川端遺跡は、多良山系に水源を持ち、大村湾に注ぐ郡川水系及び大上戸川水系によって形成された大村扇状地に立地しており、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡として周知されてきました。

今回の調査では、弥生時代を中心として中世にかけての遺構や遺物を発見することができ、近年の竹松遺跡を中心とした発掘調査の成果と共に、当時の大村地域の社会を知る上で、重要なものとなりました。

この発掘調査にあたって御協力いただいた多くの関係者の皆様方に深く感謝を申し上げます。

本書を文化財保護ならびに地域の歴史を理解する資料として役立てていただければ幸いです。

平成 30 年 3 月 31 日

長崎県教育委員会教育長  
池松 誠二

## 例　　言

1. 本書は、都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴う川端遺跡発掘調査の報告書である。
2. 本書は平成 29 年度都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴う川端遺跡発掘調査報告書作成費にもとづいて発行した。
3. 本調査区は、長崎県大村市鬼橋町に所在している。
4. 調査は長崎県教育庁長崎県埋蔵文化財センターが主体となり、国際文化財株式会社と株式会社三基の共同企業体の支援を得て行った。
5. 本書で使用した平面直角座標は世界測地系を用いている。
6. 本書で使用した方位は座標北を用いている。
7. 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。  
ピット … SP　掘立柱建物 … SB　溝 … SD　土坑 … SK
8. 本書に収録した遺物の実測および製図は、長崎県埋蔵文化財センターが行った。
9. 本書収録の遺物、図面、写真類は長崎県埋蔵文化財センターに保管している。
10. 本書の編集は宮木貴史が行い、石器については川道寛が、その他については宮木が執筆した。
11. 本書に掲載した地形分類図は、国土調査による『5 万分の 1 土地分類基本調査（地形分類図）「大村」長崎県（1973）』を使用し作成したものである。引用元 URL：国土交通省国土政策局国土情報課ウェブサイト <http://nrb-www.mlit.go.jp/kokjo/tochimizu/F3/ZOOMA/4204/index.html>
12. 本書に掲載した周辺遺跡分布図は、国土地理院コンテンツの標準地図及び色別標高図タイルを使用し加工して作成したものである。引用元 URL：国土地理院ウェブサイト <https://maps.gsi.go.jp/#5/35.362222/138.731389&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1j010u0f0&d=v>
13. 本書で報告した発掘調査の長崎県遺跡調査番号は以下のとおり。

平成 27 年度試掘調査 : 201516　平成 29 年度本調査 : 201704

## 本文目次

	図 10 A 区遺構分布図 (S=1/100) .....	14
	図 11 B 区 C 区遺構分布図 (S=1/100) .....	15
	図 12 SK01 遺構図面 (S=1/50) .....	16
I. 調査の経過 .....	1 図 13 SB01 遺構図面 (S=1/80) .....	16
1. 調査に至る経緯 .....	1 図 14 SD01 遺構図面 (S=1/80) .....	17
2. 試掘確認調査 .....	2 図 15 遺構出土遺物 .....	18
(1) 調査期間と面積	図 16 A 区包含層出土遺物 .....	19
(2) 調査体制	図 17 B 区包含層出土遺物 .....	20
(3) 試掘調査の概要	図 18 かく乱・表土出土遺物 .....	21
3. 本調査の経過 .....	4 図 19 出土土師器・磁器 .....	21
4. 整理作業の経過 .....	4 図 20 出土石鍋 .....	22
	図 21 出土石器 .....	23
II. 遺跡の環境 .....	5 図 22 判別図 .....	24
1. 地理的環境 .....	5	
2. 歴史的環境 .....	6	

## 表目次

III. 本調査 .....	9	
1. 調査の概要 .....	9 表 1 周辺遺跡一覧 .....	6
(1) 調査体制	表 2 石器分析表 .....	24
(2) 基本層序	表 3 出土遺物一覧 (弥生土器・古墳時代の土	
2. 遺構 .....	12 師器) .....	25
3. 出土遺物 .....	17 表 4 出土遺物一覧 (中世の土師器・磁器) .....	25
	表 5 出土遺物一覧 (石鍋) .....	25
IV. 総括 .....	25 表 6 出土遺物一覧 (石器) .....	25

## 図目次

図 1 都市計画道路池田沖田線位置図 .....	1 【巻頭図版】
図 2 都市計画道路池田沖田線詳細図 .....	1 卷頭図版 1
図 3 試掘調査坑北壁土層図 (TP5 ~ 9) .....	3 写真 1 川端遺跡遠景 (南から都市計画道路
図 4 地形分類図 (S=1/40000) .....	5 池田沖田線沿線を望む)
図 5 周辺遺跡分布図 (S=1/20000) .....	7 写真 2 川端遺跡遠景 (東から大村湾を望む)
図 6 A 区東壁土層断面図 (S=1/50) .....	10 卷頭図版 2
図 7 B 区東壁土層断面図 (S=1/50) .....	11 写真 3 川端遺跡 A 区鉛直 (包含層検出状況)
図 8 C 区東壁土層断面図 (S=1/50) .....	12 卷頭図版 3
図 9 川端遺跡調査区平面図 .....	13 写真 4 川端遺跡 B 区鉛直 (包含層検出状況)

## 写真目次

- 卷頭図版 4  
写真 5 SB01 検出状況  
卷頭図版 5  
写真 6 SB01 完掘状況  
写真 7 SP52 遺物検出状況  
卷頭図版 6  
写真 8 川端遺跡出土遺物群
- 写真 28 遺物番号 33-40  
写真図版 8  
写真 29 出土石鍋群（遺物番号 41-46）  
写真 30 出土石器群（遺物番号 47-56）

### 【本文写真】

- 写真 9 SD01 出土磁器片  
写真 10 石器拡大写真

### 【写真図版】

- 写真図版 1  
写真 11 表土掘削作業  
写真 12 A 区人力精査状況  
写真 13 B 区人力精査状況  
写真 14 C 区人力精査状況  
写真 15 B 区包含層検出状況  
写真図版 2  
写真 16 SK01 検出状況  
写真 17 SK01 板石材検出状況  
写真 18 SD01 検出状況  
写真 19 SD01 南北ベルト土層断面  
写真 20 SK02 土師器杯検出状況  
写真 21 土師器小皿検出状況  
写真 22 SP40 遺物検出状況  
写真 23 土器集中箇所検出状況  
写真図版 3  
写真 24 遺物番号 1-8  
写真図版 4  
写真 25 遺物番号 9-16  
写真図版 5  
写真 26 遺物番号 17-24  
写真図版 6  
写真 27 遺物番号 25-32

## I . 調査の経過

### 1. 調査に至る経緯

#### ( 1 ) 都市計画道路池田沖田線の概要

都市計画道路「池田沖田線」は、国道 34 号のバイパス機能を有し、中心市街地の交通渋滞の緩和と地域の利便性の向上を目的として、平成 15 年 8 月 22 日に都市計画決定された。大村市池田 2 丁目から沖田町を起終点として、延長 3,420m の路線である。

大村市の中心市街地以南における幹線道路は、国道 34 号のみであり、慢性的な交通混雑が発生している。また、池田沖田線の建設予定地周辺では市街地化が進んでいるが、幅員の狭い道路網の中に市街地を形成している状況である。このような状況を解消するために、当該路線を整備することになった。

久原池田線、富の原鬼橋線、国道 444 号とのネットワークを形成することで、長崎自動車道大村 IC、九州新幹線西九州ルート新大村駅、長崎空港とのアクセスを容易にし、緊急時における円滑な交通の確保を図る。さらにそのバイパス機能により混雑している国道 34 号の渋滞緩和に寄与し、ひいては防災上危険な市街地の解消につなげることを目的とする。工事は 2 工区に分かれ小路口工区延長 1,450m 、(平成 20 年度～ 26 年度)。竹松工区延長 1,970m の (平成 22 年度～ 28 年度) 予定である。なお小路口工区は平成 27 年 3 月に供用開始となっている。



図 1 都市計画道路池田沖田線位置図（長崎県 HP 池田沖田線事業概要より）

図 2 都市計画道路池田沖田線詳細図（長崎県 HP 池田沖田線事業概要より）

## 2. 試掘確認調査

### (1) 調査期間と面積

期間：平成 27 年 11 月 13 日～平成 27 年 12 月 2 日

面積：117 m<sup>2</sup>（内、川端遺跡調査対象地 22 m<sup>2</sup>）

### (2) 調査体制

調査担当機関：長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所

調査担当者 係長 村川 逸朗

主任文化財保護主事 川畠 敏則

### (3) 試掘調査の概要

都市計画道路池田沖田線建設予定地内は、周知の文化財包蔵地が存在しているため、埋蔵文化財の取り扱いについて県央振興局都市計画課との事前協議を必要とした。

平成 24 年 5 月 24 日、工事に先立ち長崎県教育委員会は、県央振興局と「竹松遺跡及び道路建設予定地内の埋蔵文化財の取り扱い」について事前の打ち合わせを実施した。県教育委員会は周知の埋蔵文化財包蔵地である竹松遺跡の重要性を説明するとともに路線計画が変更できない場合は記録保存の方法で対処する旨を通知した。さらに竹松遺跡の範囲確認調査の具体的方法も説明した。用地買収が完了した箇所から、20m 間隔で 2m × 2m の試掘坑を設定する予定である事、立ち退き宅地跡及び地形の状況などから設定箇所が変化する事、また現地下見の結果から本調査になった場合大規模な調査が予想される事を通知した。

#### ①調査方法

調査対象地は、都市計画道路予定地の南北 700m 路線幅 10.4m での範囲内である。平成 25・26 年度に用地買収が済んだところから範囲確認と試掘調査を実施したが、未買収のところは調査ができずに調査対象地全域の中で班状に未調査地が残存していた。その未調査地に試掘調査坑を 2m × 2m を基本とし、状況を見て 3m × 3m の試掘調査坑で調査を実施した。23 箇所 117 m<sup>2</sup>を確認し、川端遺跡調査範囲に係るものは 5 箇所 (TP5 ~ 9) 22 m<sup>2</sup>である。

#### ②基本層序

1 層：耕作土。

2 層：黒色～暗灰黄色土。粒子が細かく湿ると粘性大。しまり無し。中世～弥生時代の遺物包含層。

3 層：褐色土。粘性しまり大。全体に円礫が混じる。

4 層：砂礫層。地山。

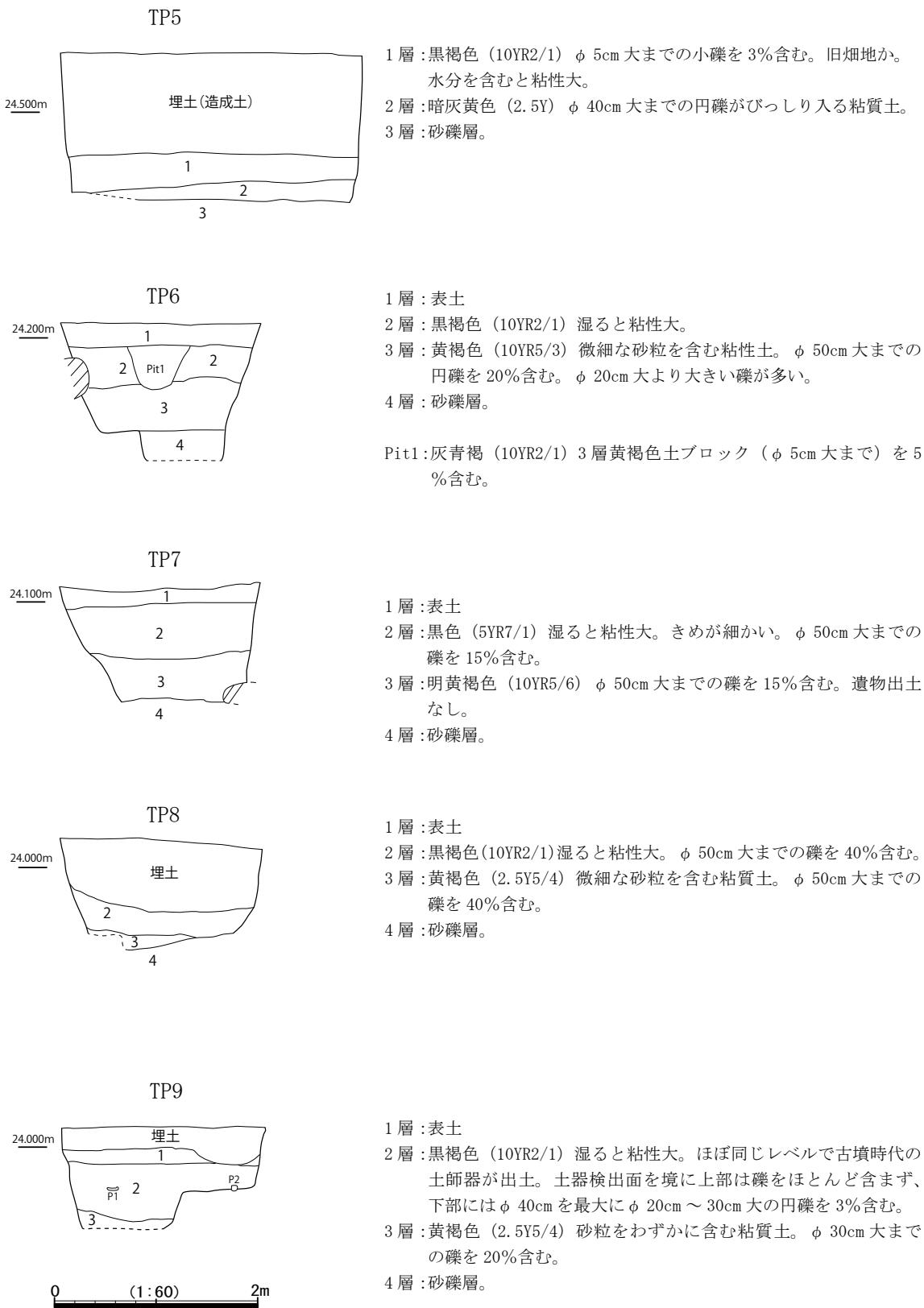


図 3 試掘調査坑北壁土層図 (TP5 ~ 9)

### ③調査結果

試掘調査坑からピットや古墳時代の土師器などが出土した。特にTP9では、古墳時代（6世紀）の高環が出土している。弥生時代から古墳時代の遺構・遺物が検出されることが見込まれ、本調査を実施することとなった。

## 3. 本調査の経過

今回の調査では、調査対象地外に排土置き場を確保できなかつたため、調査区を約半分に区切り、打って返す反転調査を行つた。期間は準備工や撤収を含めて6月2日から10月18日までの約4か月で、6月19日からB区の調査を、8月21日からA区・C区の調査を行つた。

以下に調査の経過を時系列に沿つてまとめる。

6月2日の現地打ち合わせを受けて、用地内の除草作業や整地作業を行い、6月9日には調査地の測量を行つた。6月12日からB区で重機による表土掘削を開始する。6月15～16日でプレハブハウスの搬入と建設を終わらせる。

6月19日から作業員の稼動を開始する。遺構の検出作業を行う。作業中乾燥によって砂塵が広範囲に飛散してしまうため、ハイウォッシャーを導入し、放水によってこれを防止する。土坑やピット群が検出された。遺物では、弥生時代後期の土器が多く出土した。

7月27日から下層確認とB区完掘検査へ向けて準備を始める。それと平行してC区の人力による表土掘削を開始する。7月31日にB区完掘検査を行い、B区の調査を終了する。終了後から、B区の埋め戻し及びA区の重機による表土掘削を開始する。

反転期間とお盆休みを挟んで、8月21日から作業員の稼動を再開する。遺構の検出作業を行う。近現代のゴミ穴や、耕作に邪魔な礫を埋めたと思われる礫穴が多く検出された。調査区内の包含層の残りは限定的である。調査区北域は、比較的包含層の残りがよく、堆積も厚い。遺物も多く出土した。9月6日には、掘立柱建物跡と考えられる柱穴列を検出した。9月14日には、A区C区の完掘状況の空中写真を撮影した。

以降は、基盤層である大村扇状地礫層面が検出するまで掘削し、9月28日に作業員の稼動を終了した。10月2日にはA区C区の完掘検査を実施し、川端遺跡の調査を終了した。その後、A区C区の埋め戻しと現場事務所の撤収作業を行い、10月18日に撤収を完了した。

## 4. 整理作業の経過

発掘調査終了後、平成29年10月23日から平成30年1月31日にかけて、長崎県埋蔵文化財センターにおいて報告書作成に向けた整理作業を実施した。臨時作業員を雇用し、遺物の水洗、接合、ID番号付与、実測、デジタルトレースを行つた。以下に整理作業の経過を時系列に沿つてまとめる。

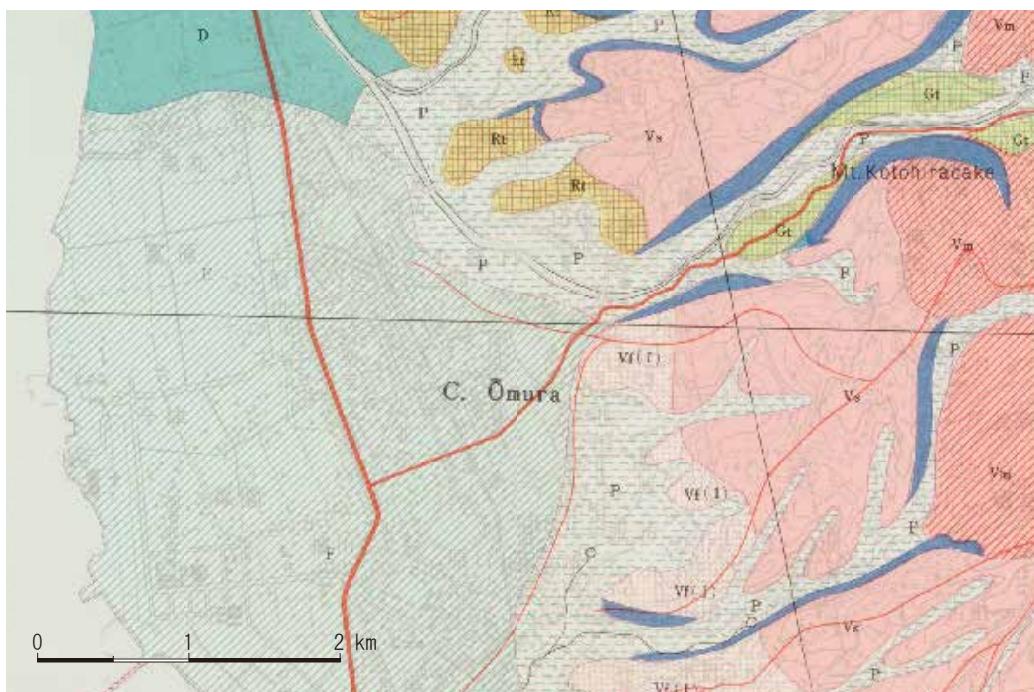
10月23日から作業員の稼動を開始し、遺物の水洗を行う。10月31日から遺物の接合を開始する。平行して順次、遺物にID番号を付与していく。必要であれば、石膏による遺物の補強も行った。

11月14日から、接合及びID番号の付与が終了したものについて、実測を行つた。1月31日から、実測が終了したものについて、順次デジタルトレースを行つた。整理作業終了後、出土遺物は、長崎県埋蔵文化財センター内の収蔵庫にて保管している。

## II. 遺跡の環境

### 1. 地理的環境

川端遺跡の位置する大村市は長崎県本土部のほぼ中央にあり、東に多良山系、西に大村湾を望み、郡川、大上戸川が形成した扇状地を主体とする平野上に広がる街である。大村扇状地は、荒瀬町坂口を扇頂として扇頂角135° 半径約3kmで、県内第一の広さを持つ河成扇状地である。扇状地の北側には、黒木渓谷を水源として、大村湾へ注ぐ二級河川の郡川が流れている。郡川は、多良山系の西側斜面から流れ出で、南ノ内川と合流して西へ流れ、扇状地の扇頂に至り北西へと向きを変える。寿古町で向きを再び西へ変え、寿古町と沖田町の境を流れて大村湾へと至る。この郡川が南北方向へ流路を変えながら、大量の土砂を運ぶことにより形成したのが大村扇状地である。郡川を中心とした豊富な水資源と、扇状地上の広い平野を支えとして、古来より人々の生活が営まれてきた。現在でも水田、畑作、果樹園等の多くの生産活動が行われている。



**【山地・火山地】**  
Mm : 中起伏山地（起伏量400m～200m）  
Ms : 小起伏山地（起伏量200m以下）  
Mf(1) : 山麓地I（起伏量100m～50m）  
Vm : 中起伏火山地（起伏量400～200m）  
Vs : 小起伏火山地（起伏量200m以下）  
Vf(1) : 火山麓地I（起伏量100m～50m）  
Vf(2) : 火山麓地II（起伏量50m以下）

**【丘陵地】**  
H1 : 丘陵地(1)（起伏量200～100m）  
Hs : 丘陵地(2)（起伏量100m以下）

**【台地・段丘】**  
Rt : 岩石台地・段丘  
Gt : 砂礫台地・段丘  
Lp : 溶岩台地  
  
**【低地】**  
P : 谷底平野  
F : 扇状地  
D : 三角州および海岸平野

図4 地形分類図 (S=1/40000)

地図データ「5万分の1土地分類基本調査（地形分類図）「大村」長崎県（1973）」（国土交通省）をもとに作成

## 2. 歴史的環境

川端遺跡の周辺域には、大規模集落跡である竹松遺跡や黒丸遺跡など多くの遺跡が分布している。これらの遺跡分布から大村扇状地及びその周辺域は、各時代の人々の生産活動から、生活域として利用されていたことが継続的な発掘調査から解明されつつある。

郡川の右岸に広がる多良岳系の丘陵上に旧石器時代の遺跡が分布している。主な遺跡として「野田の久保遺跡」「葛城遺跡」がある。野田の久保遺跡は、包含層はないものの淀姫系や腰岳・牟田系黒曜石を素材にした多くの石器類が出土している。葛城遺跡は、腰岳・牟田系をはじめ小鯛系や淀姫系の黒曜石を素材とする多くのナイフ形石器・台形石器を出土している。

縄文時代の主な遺跡として、「立小路遺跡」「黒丸遺跡」「竹松遺跡」「岩名遺跡」「荒瀬遺跡」「嶽ノ下A遺跡」がある。黒丸遺跡は、郡川河口付近の広い水田地帯にあって縄文時代～近世にかけての遺物が出土しており、その中でも縄文時代後期から晩期の遺構・遺物に注目が集まる。特に深鉢土器を埋設した埋甕と呼ばれる墓が多く発見されている。岩名遺跡は、弥生時代後期の成人甕棺墓が発見されたことで知られた遺跡だが、縄文時代早期・晩期の土器も多く出土している。特に晩期の黒川式土器が多い。嶽ノ下A遺跡では、円形の堅穴住居跡が発見されており、その床面や周辺から黒曜石製の

表1 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	立地	時代	備考
1	川端遺跡	遺物包含地	平野	弥生時代～中世	
2	立小路遺跡	遺物包含地	平野	縄文	
3	平野遺跡	遺物包含地	平野	縄文時代～中世	
4	小路口遺跡	遺物包含地	平野	縄文時代～中世	
5	小路口鬼の穴古墳古墳		平野	古墳時代	横穴式石室
6	富の原遺跡	遺物包含地	平野	弥生時代	甕棺・鉄戈
7	黒丸遺跡	遺物包含地	平野	縄文時代～近世	集落遺跡
8	沖田黒丸条里	条里跡	平野	古代～中世	
9	竹松遺跡	遺物包含地	平野	縄文時代～近世	
10	冷泉遺跡	遺物包含地	台地	古墳時代	
11	今富城跡	城館跡	台地	中世	大村氏の居城
12	稗田遺跡	遺物包含地	丘陵	弥生時代～古墳時代	集落遺跡
13	好武城跡	城館跡	丘陵	中世	大村氏の居城
14	寿古遺跡	遺物包含地	丘陵	旧石器時代～近世	
15	野田の久保遺跡	遺物包含地	丘陵	縄文時代・弥生時代・近世	
16	野田古墳	古墳	丘陵	古墳時代	横穴式石室
17	黄金山古墳	古墳	台地	古墳時代	石棺系横口式石室
18	地堂古墳	古墳	台地	古墳時代	横穴式石室
19	岩名遺跡	遺物包含地	平野	縄文～弥生時代	甕棺
20	葛城古墳	古墳	台地	古墳時代	横穴式石室
21	野田遺跡	遺物包含地	台地	縄文時代・弥生時代・近世	
22	葛城遺跡	遺物包含地	台地	旧石器時代	
23	荒瀬遺跡	遺物包含地	平野	縄文時代	
24	坂口館跡	城館跡	平野	中世	大村純忠の居館
25	上小路口古墳	古墳	平野	古墳時代	横穴式石室
26	嶽ノ下A遺跡	遺物包含地	平野	縄文時代～近世	

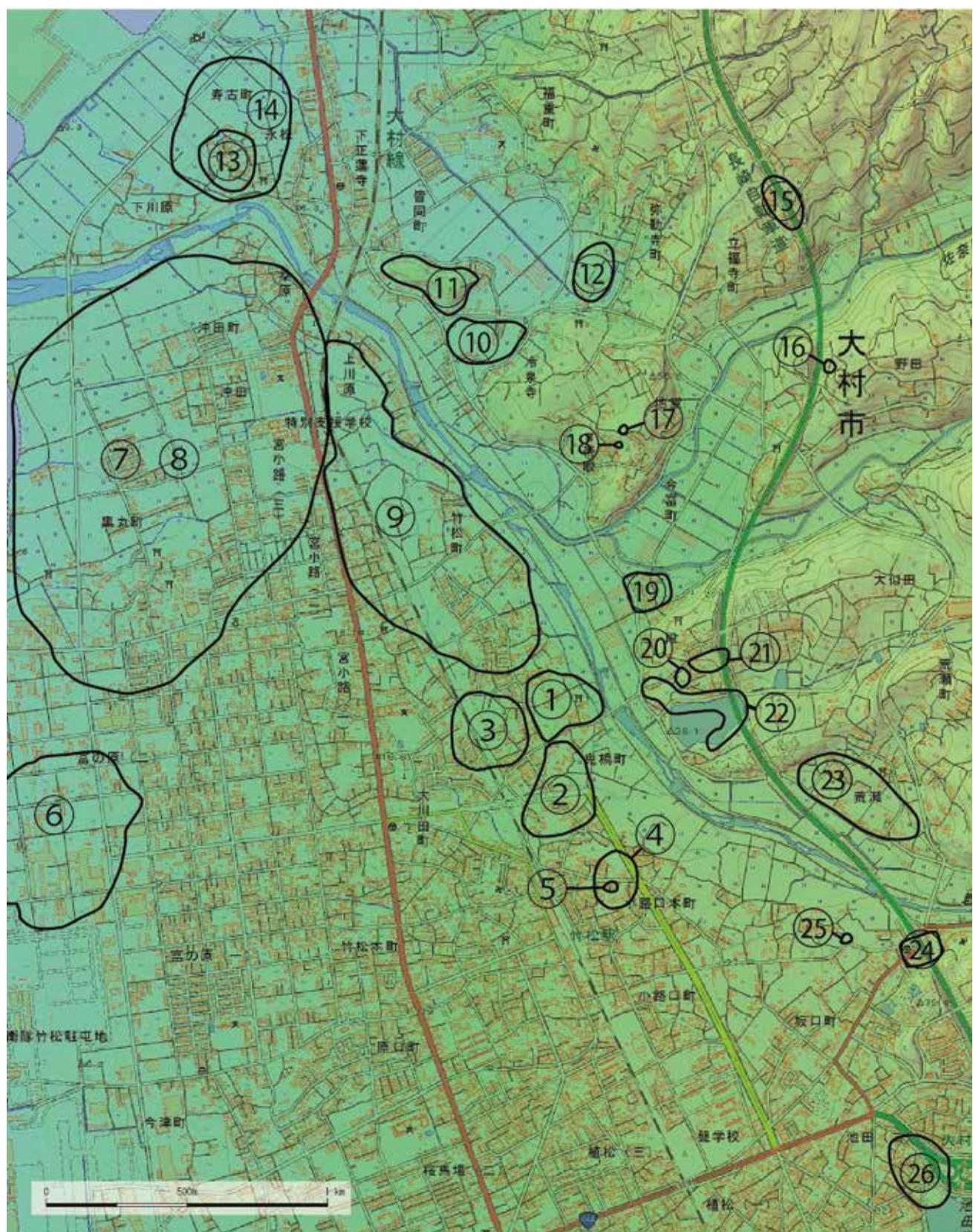


図5 周辺遺跡分布図 (S=1/20000)

「標準地図及び色別標高図データ」(国土地理院)をもとに作成

石鏃や縄文時代晩期の土器などが出土している。

弥生時代の主な遺跡として「平野遺跡」「小路口遺跡」「富の原遺跡」「黒丸遺跡」「竹松遺跡」「稗田遺跡」「岩名遺跡」がある。富の原遺跡は、大村扇状地の扇端部で大村湾沿岸に接する。成人甕棺墓が発見され、中から鉄戈を出土したことで知られる。甕棺墓と石棺墓という異なる墓制が共存する墓地群であり、また数本の環濠が巡っていることから環濠集落であることも注目される。集落は弥生時代中期初頭から始まるが、周辺の遺跡群が古墳時代以降も存続する状況とは違い、後期前半には廃絶する。黒丸遺跡は、縄文時代晩期から近世まで続く拠点集落である。この遺跡の弥生時代の特徴として、土堀り具と考えられる扁平打製石斧が多量に出土しており、初期農耕の可能性を示す。また、舟状木製品と呼称される他に類例のないものや、国内では珍しい擦切り技法を用いた石包丁なども出土している。水稻稲作の始まる初期の遺跡として重要である。竹松遺跡は、縄文時代から近世にかけての大規模集落遺跡である。特に弥生時代と古代が主体となる。現在までに竪穴住居跡群、石棺墓、甕棺墓が発見されている。稗田遺跡は、多良山麓の丘陵上に位置し、円形・方形の竪穴住居跡が検出されている。北部九州系の土器群と、有明海周辺を中心とする「突帯文系土器」が共に発見されている。岩名遺跡では弥生時代後期の甕棺墓が発見されている。

古墳時代の主な遺跡として「小路口鬼の穴古墳」「冷泉遺跡」「野田古墳」「黄金山古墳」「地堂古墳」「葛城古墳」「上小路口古墳」がある。小路口鬼の穴古墳は、南に開口する両袖複室の横穴式石室を主体部を持つ。墳丘は直径 20m ほど、高さ 3m ほどのやや不整形な円墳で、石室の構築方法から、6 世紀後半頃の築造と考えられる。冷泉遺跡は、郡川中流右岸の平地上に位置する。円形・方形の竪穴住居跡や石棺墓、配石墓が発見されている。古式土師器を伴う土器群と、舶載鏡の破鏡が出土している。弥生時代終末～古墳時代初頭の遺跡である。黄金山古墳は、多良岳から派生する丘陵上に位置する。墳丘の規模等は不明であるが、主体部は東に開口する石棺系横口式石室である。古式土師器、鐵鏃、刀剣、鉄槍、人骨等が出土しており、4 世紀末～5 世紀前半頃の築造と考えられている。地堂古墳は、黄金山古墳の南 100m ほどの所に位置し、丘陵の斜面部に作られている。主体部は、南に開口する複室の横穴式石室である。小路口鬼の穴古墳とほぼ同時期の 6 世紀後半頃の築造と考えられている。

古代から中世の遺跡として「沖田黒丸条里」「竹松遺跡」「今富城跡」「好武城跡」「寿古遺跡」「坂口館跡」がある。沖田黒丸条里は、郡川下流右岸の沖田町・黒丸町・宮小路にかけて広がる条里地割である。大村市域は、古代の行政区分で彼杵郡に属する。郡川河口域にある沖田黒丸条里は、彼杵郡最大の条里地割とされ、現在にまでその地割を残す。彼杵郡の郡衙の比定地として、郡川河口域が想定されることが多い。郡川左岸に位置する竹松遺跡では、郡衙の所在を思わせる出土遺物が多く出土している。また、平安時代末頃の倉庫群と考えられる建物跡群が発見されており、注目されている。今富城跡は、郡川中流域右岸の独立丘陵上に位置する。江戸時代に編纂された『大村郷村記』では、大村純伊によつて築かれたとされる。寿古遺跡は郡川下流域右岸に位置し、中心には好武城跡を有する。『大村郷村記』では、大村純治が築造されたとされているが、寿古遺跡では純治が活躍したとされる 15 世紀よりも古い、12 世紀後半の遺物が多い。坂口館跡は、キリスト教大名として知られる大村純忠の終焉の居館跡とされる。

大村市は、郡川流域に広がる扇状地上に、縄文時代から近世、そして現代にかけて連綿と人々の生活が営まれてきた歴史を持つ。当初、郡川下流域を拠点として集落が形成されていたが、徐々に南へとその中心を移動させ、近世から現在においては、大上戸川下流域に中心市街地を持つ。

## III. 本調査

### 1. 調査の概要

#### (1) 調査体制

川端遺跡の本調査は、長崎県教育庁長崎県埋蔵文化財センターが担当し、発掘調査支援業務を川端遺跡1区特定埋蔵文化財発掘調査共同企業体（構成員：国際文化財株式会社、株式会社三基）に委託した。期間は平成29年6月2日（金）～平成29年10月25日（水）までの約4か月間、調査面積は1,943 m<sup>2</sup>である。

#### 長崎県埋蔵文化財センター

所長	岩永 正弘
総務課長	田川 正明
調査課長	川道 寛
調査課 文化財保護主事	宮木 貴史

#### 国際文化財株式会社

現場代理人	星野 賢一
調査員	長尾 聰子
調査員	松本 晃
調査員	多田 和幸
調査員	青山 宗靖

#### 株式会社三基

調査員	古賀 朋緒
調査員	梅木 信弘

#### (2) 基本層序

1-0層 宅地に伴う造成土。

1-1層 表土。褐灰色(7.5YR4/1) しまりは弱い。粘性は弱い。5cm長まで的小玉を5%含む。現耕作土。

1-2層 旧耕作土。2層に似る。15cmを越す礫を含まない。2～5cm大のレキを3%含む。

2層 黒褐色極細砂質シルト土(7.5YR2/2) しまりはやや弱い。粘性は弱い。水分を含むと粘性が強くなる。25cm大までのレキを20%含む。30cmを越すレキを5%含む。北側での堆積は厚く、50cmほど確認できるが、南に向けて薄くなる。弥生時代後期を主とした土器片を含む。原位置を保つ遺物はほとんどないと考えられる。

2-2層 2層と3層の混土層。

3層 黄褐色極細砂質シルト土(10YR5/8) しまりはやや弱い。粘性はやや弱い。25cm大までのレキを10%、30cmを越すレキを20%含む。

3-2層 3層と4層の混土層。

4層 砂礫層。暗赤褐色細砂質～極細砂質土(Hue2.5Y5/4)が1cm以下の小レキの隙間を埋める。5～15cm大のレキを20%、20cmを越すレキを30%含む。地山。



图 6 A 区東壁土層断面図

III. 本調査

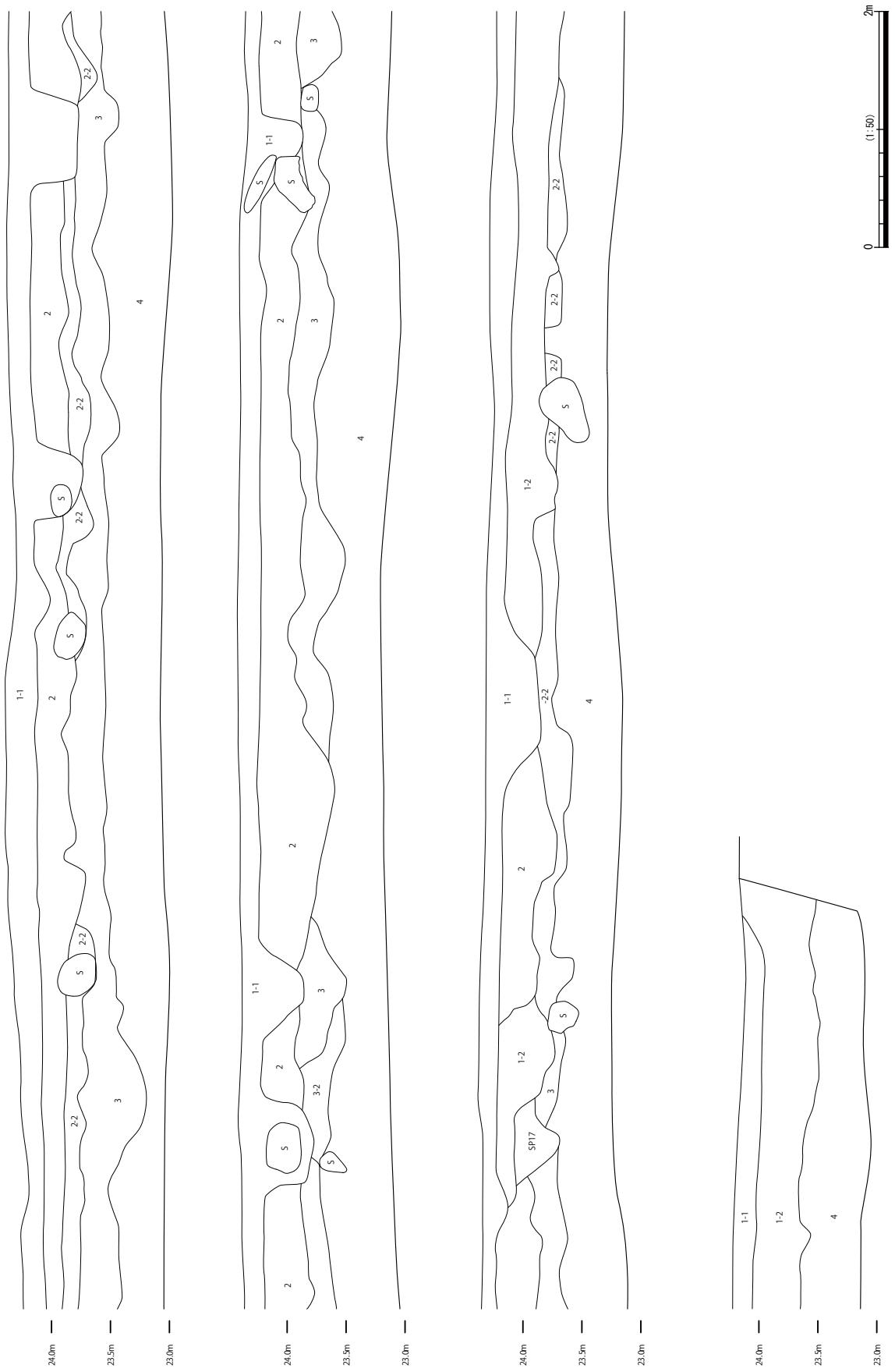


図7 B区東壁土層断面図

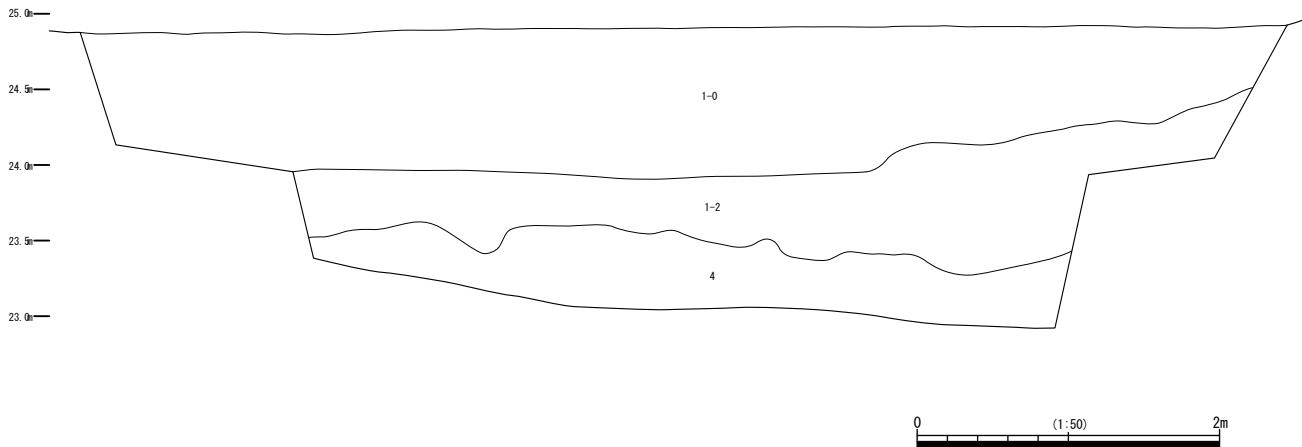


図 8 C 区東壁土層断面図

## 2. 遺構

検出した遺構総数は約 110 基で、内訳は掘立柱建物跡 1 棟・土坑 3 基・溝状遺構 1 基・ピット多数からなる。ほか、土器集中箇所を 1 カ所検出した。掘立柱建物跡 1 棟については、ピット 5 基からなる柱穴列 1 列と対応するピット 1 基を検出した。その他の構成ピットについては、調査区外にあると考えられるため、正確な規模等については把握できなかった。しかし、検出の状況から側柱建物跡と考えられる。土坑 3 基については、いずれも不整形で、遺構として明確な位置づけは難しい。SK01 については後述する。SK02 は、不整方形で浅く遺構としての性格は判然としないが、遺構底面から土師器の杯が出土している。SK03 については、不整円形で遺物の出土はなかった。溝状遺構 1 条については、調査区を東西に走るように検出したが、途中で後世のかく乱によって壊されている。その他のピット群については、いずれも小規模かつ浅く、不整形なものも多い。柱穴とは考えにくく、石の抜け跡等の可能性もある。また、瓶や空き缶などが捨てられた近現代のごみ穴が多く検出された。宅地のあった A 区での検出が顕著であった。

### (1) SK01

B 区南半 7324 グリッドの 3 層面（黄褐色層）にて検出した。長軸が 2.02m、東側短辺が 0.67m、西側短辺が 0.98m、深さが 0.22m を測る。東西に長辺を向けた隅丸の長方形を呈しているが、不整形である。遺構内で縦向きの板石材を検出したため、石棺墓の可能性も考慮したが、南辺の一部のみの検出であり、板石材も薄い破片程度であった。遺構の中央域では焼土も検出された。B 区南半は後世の削平面であり、石棺墓として断定はできないが破壊された跡の可能性がある。

### (2) SB01

A 区北半 6621・6721 グリッドの 3 層面（黄褐色層）にて検出した。調査区外にかかるが、同規模のピット 5 基からなる柱穴列 1 列と対応するピット 1 基を検出した。側柱建物跡と考えられる。長軸は座標北から西に 19 ~ 20 度ほど振れている。隣接している竹松遺跡で確認されている建物跡群とは一致しない。

柱間は 1.9m ~ 2.04m、ピットの規模は直径 0.62 ~ 0.76m で、深さは 0.303 ~ 0.632m、柱痕跡のあるピットもある。遺物の出土はない。

### III. 本調査

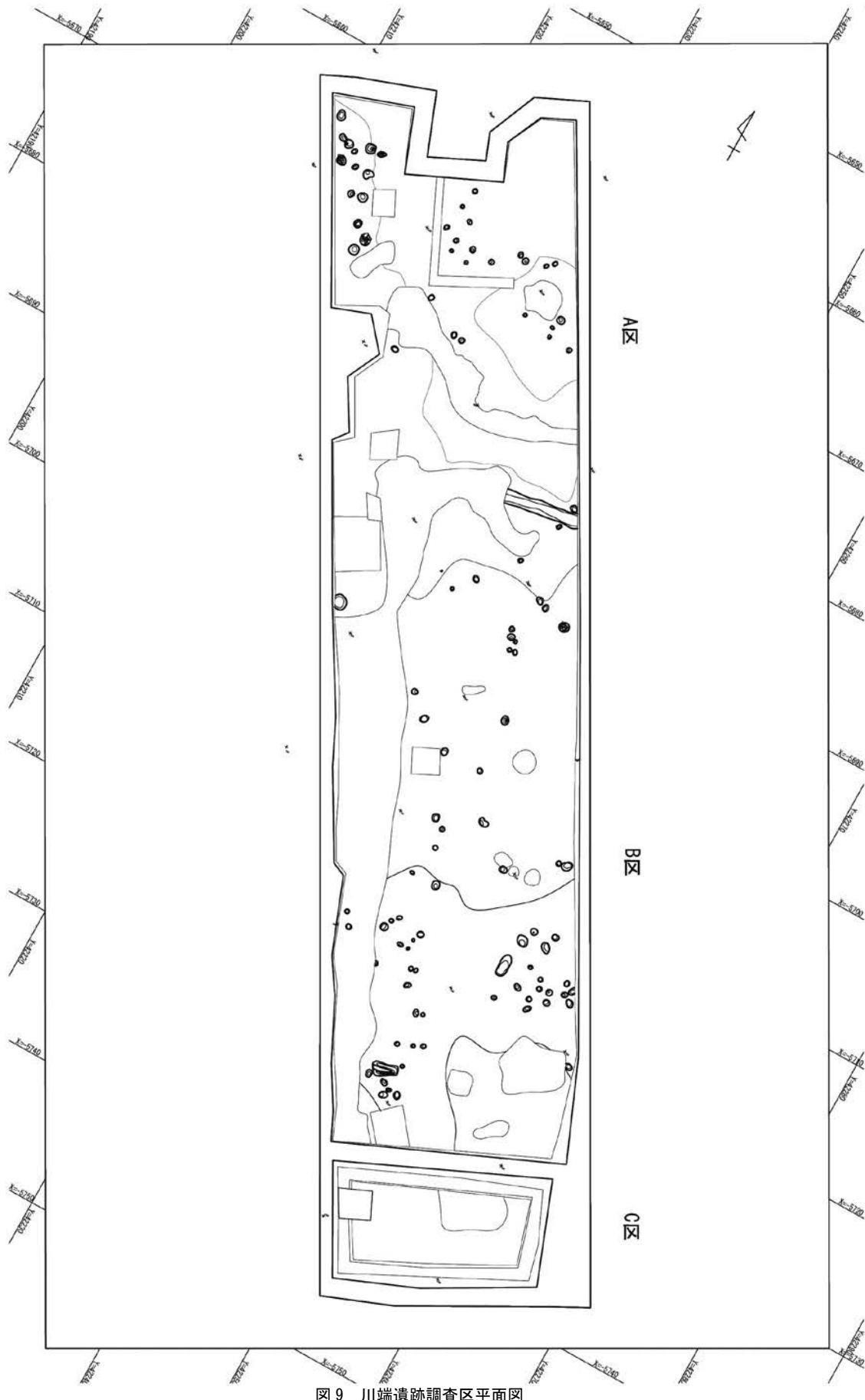
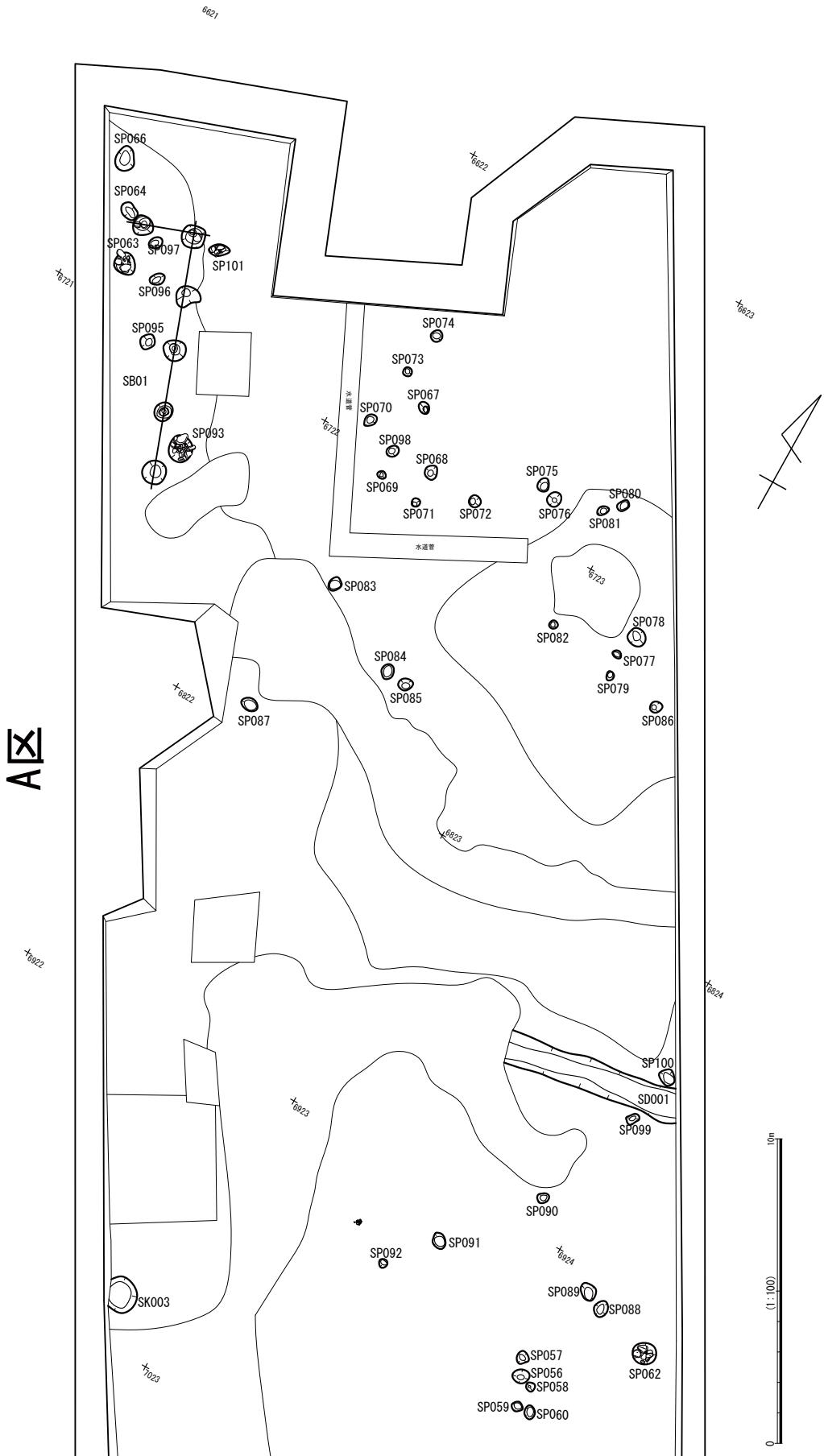


図9 川端遺跡調査区平面図

图 10 A区遗構分布図



III. 本調査

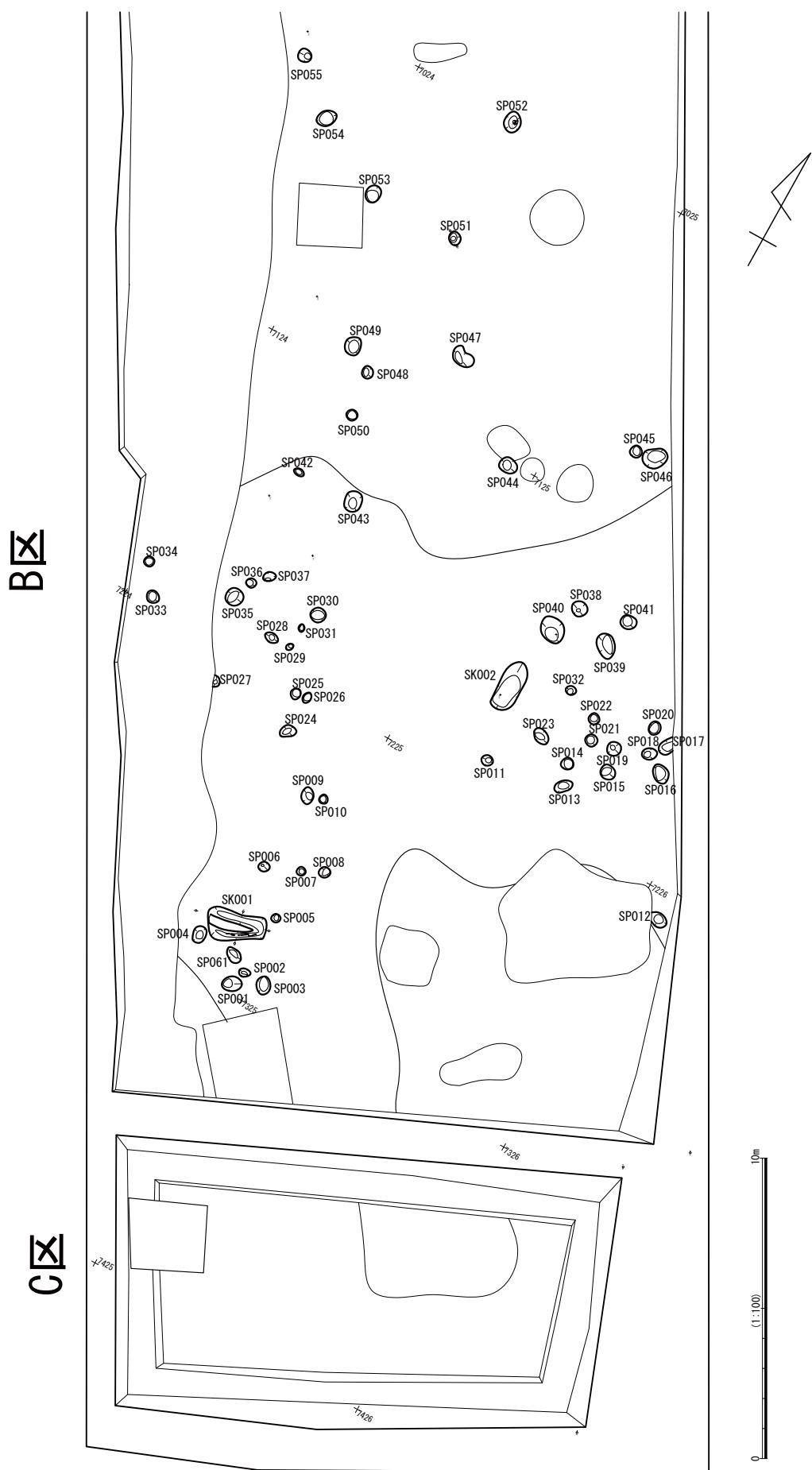


図 11 B区 C区遺構分布図

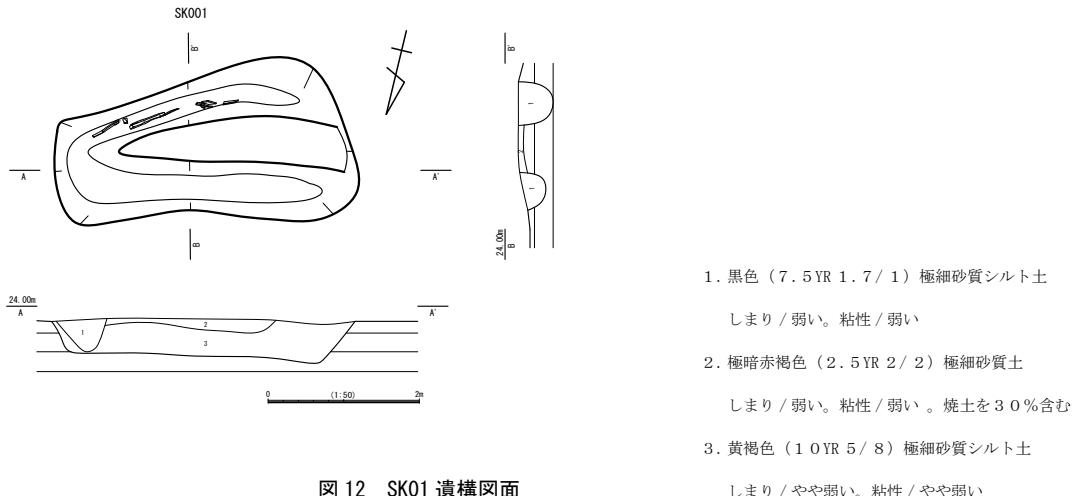


図 12 SK01 遺構図面

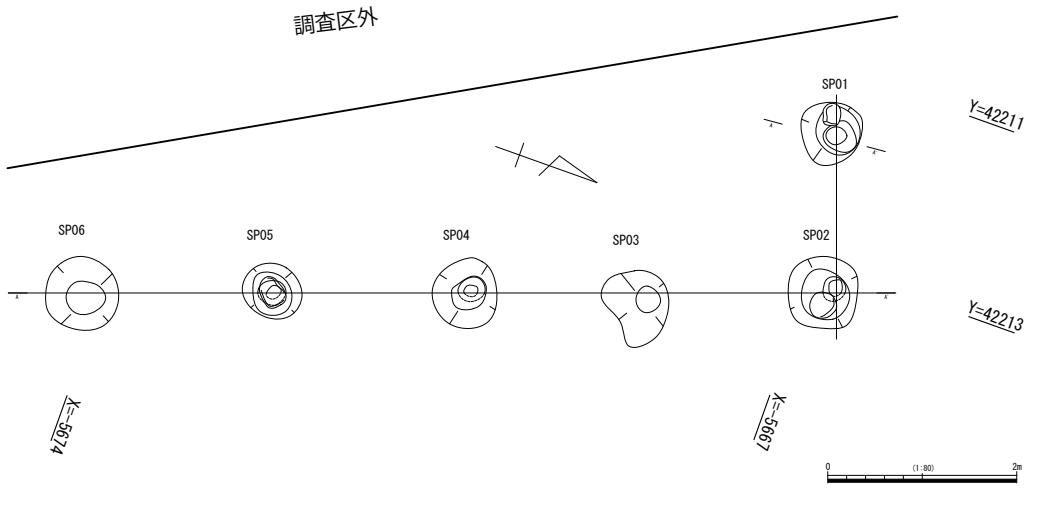


図 13 SB01 遺構図面

1. 黒褐色 (5 YR 2/1) 極細砂質シルト土  
しまり / 弱い。粘性 / 弱い。3cm程の玉石を3%、  
5~10cm程の玉石を5%含む。  
黒褐色 (5 YR 2/1) 極細砂質シルト土  
2. しまり / 弱い。粘性 / 弱い。黄褐色 (10 YR 5/8)  
ブロックを5%含む。10~20cm程の玉石を  
20%含む。

## (3) SD01

A区南半 6823・6824 グリッドの3層面（黄褐色層）にて検出した。東西方向に伸びる。長さは残存で 5.86m、最大幅は 1.17m、深さは最大 0.328m を測る。遺構内からは青磁の小破片が出土した。小破片のため時期の特定はできない。

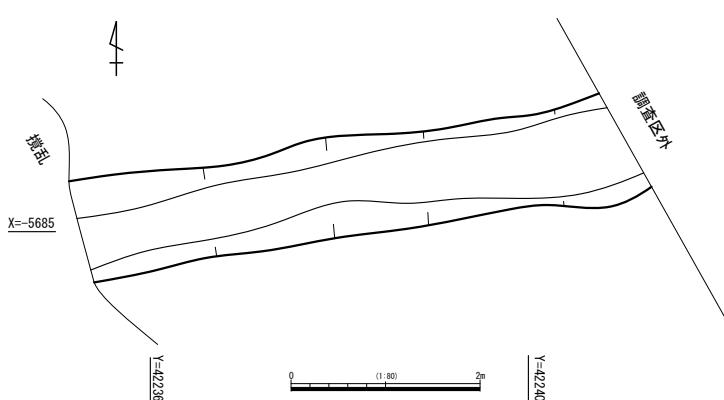


図 14 SD01 遺構図面



写真 9 SD01 出土磁器片

## 3. 出土遺物

遺物は、包含層である2層（黒褐色層）内からの出土がほとんどであった。弥生時代後期の遺物を主体として、一部古墳時代の遺物が混じる。また、量は少ないが古代～中世の土師器が出土している。周辺の竹松遺跡などで多くみられるような貿易陶磁器類は、小破片で数点のみの出土であった。後世のゴミ穴などのかく乱からは、近世以降の陶磁器類が多く出土した。その一部に弥生土器や石鍋が混ざって出土している。黒曜石製の石器類は、包含層や表土層からの出土である。石鏸が1点のみ、4層上面で出土している。

## (1) 弥生土器・古墳時代の土師器

出土遺物のうち、主体を占めるのは弥生時代後期の土器群である。遺構に伴う遺物は少なく、ほとんどが包含層である2層（黒褐色層）からの出土である。一部、古墳時代の土師器が混ざる。須恵器などの出土は見られなかった。

1～6はSP52出土の土器である。SP52からは小破片を含めて71点の遺物が出土した。そのうち図示可能な資料について報告する。1は壺の口縁部である。直線的に伸びるくの字口縁で、端部は面がある。多少ゆがみがみられ、やや雑な印象を受ける。2は鉢の口縁部である。深鉢形を呈し、口縁はやや外方に開きながら直線的に伸びる。口縁端部は丸くおさめる。3は甕の口縁部である。直線的に伸びるくの字口縁で、端部は丸くおさめる。外面調整はタテハケのちヨコナデ、内面調整はナナメ方向のハケのちヨコナデを施す。4は甕の口縁部である。直線的に伸びるくの字口縁で、端部は丸くおさめる。内外面ともハケ調整を施す。特に外面は細かくハケ調整を行っており、丁寧な印象を受ける。5は甕の口縁部である。直線的に伸びるくの字口縁だが、非常に短い。端部は丸くおさめる。胴部が張り出し、頸部がすぼまっている。丁寧なハケ調整を施す。6は甕か壺の底部である。レンズ底で内外面ともハケ調整を施す。

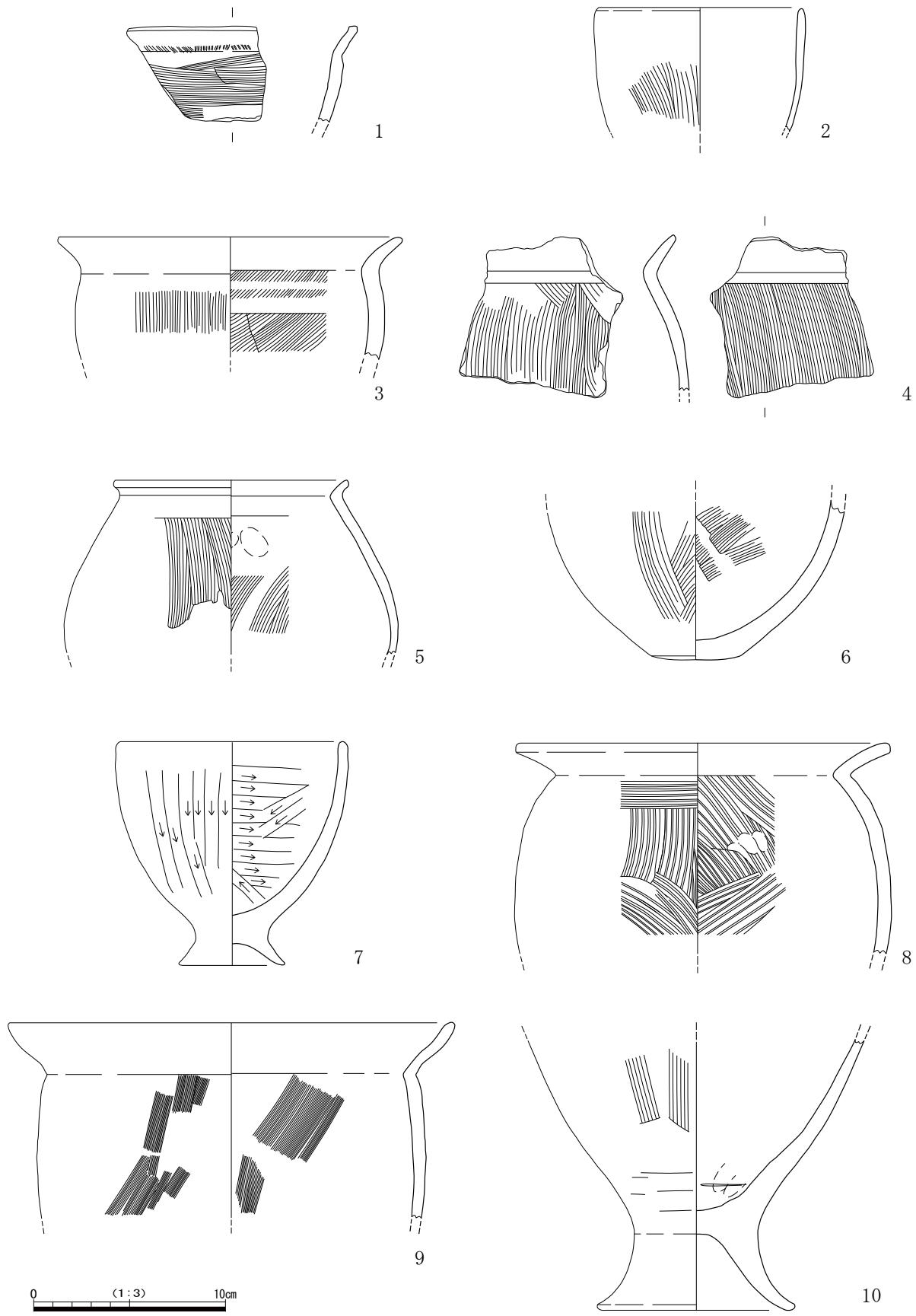


図 15 遺構出土遺物

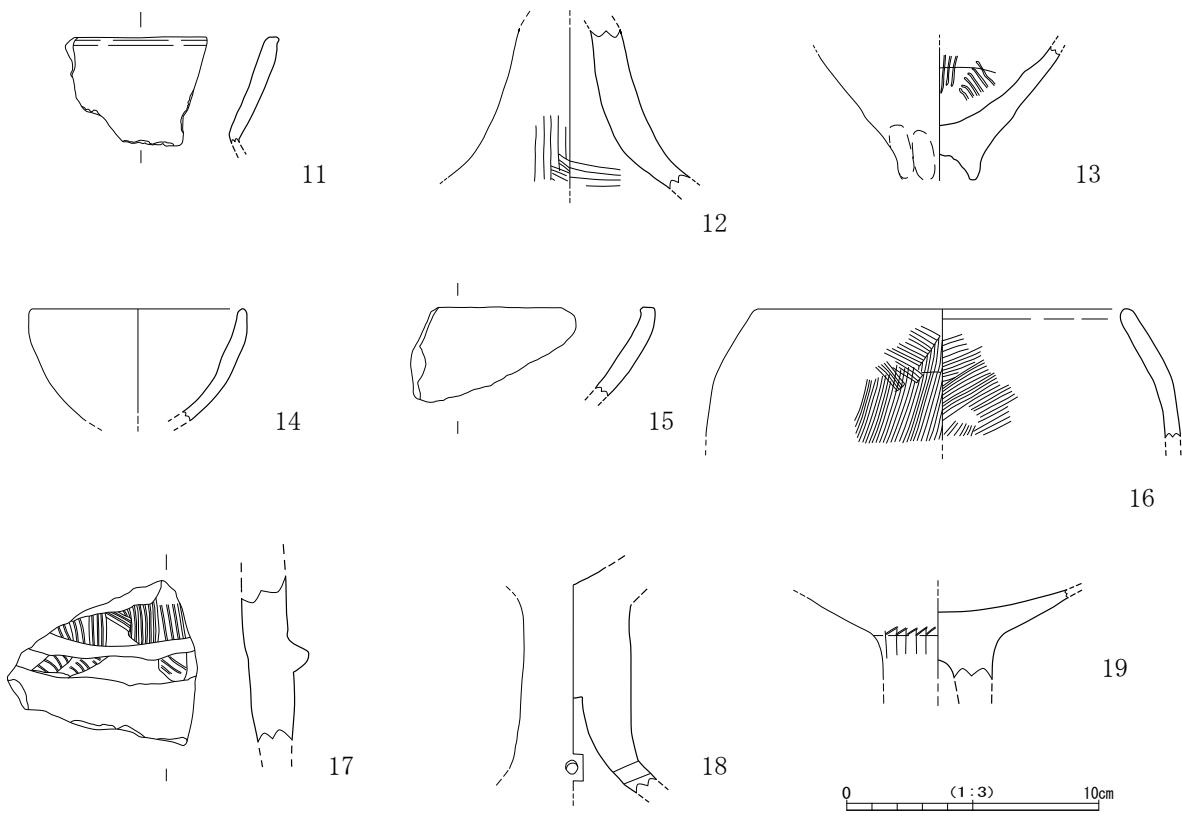


図 16 A 区包含層出土遺物

7・8はSP40出土の土器である。7は台付の鉢で、小形の深鉢に直線的に伸びる脚台が付く。口縁端部は丸くおさめ、内外面にヘラ状工具によるナデ調整を施す。8は甕の口縁部である。やや外反気味に伸びるくの字口縁で、口縁の屈曲は強い。口縁端部は丸くおさめる。胴部は中位に向かって張り出し、多方向にハケ調整を施している。

9・10は土器集中箇所の土器である。小破片を含めて74点が出土している。9は甕の口縁部である。やや内湾気味に伸びるくの字口縁で、端部は丸くおさめる。胴部は張り出さず直線的に伸びる。内外面とも細かいハケ調整を施す。10は台付甕の脚台部で、外反しながら伸び、裾の広がりは大きい。9・10は弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての資料と考えられる。

11～19は、A区の2層（黒褐色層）から出土した資料である。11は甕の口縁である。やや内湾気味に伸び、端部は面を持ち、外方へやや摘まれている。12は高坏の脚柱部である。裾部へ向かう屈曲は弱くゆるやかに開く。13は台付甕の底部である。脚台が接合部から剥がれている。甕と台を別々に作り、組み合わせて製作したと考えられる。14は坏の口縁から胴部にかけての資料である。ナデ調整を施すが、器面や口縁端部に凹凸がみられ、粗雑な印象を受ける。15は坏の口縁部で、端部が面を持ち、内側につままれている。ナデ調整が施され、器面が整えられている。16は鉢の口縁部である。内傾した口縁で端部は丸くおさめる。内外面とも細かいハケ調整を施している。17は壺の肩部で、台形状の突帯を持つ。器面にはハケ調整を施し、突帯にはキザミがみられる。18は高坏の脚柱部である。裾部へ向かう屈曲部はゆるやかで、4方向に穿孔がある。脚柱部の上方から半分ほどまでが中実となっている。古墳時代前期の資料と考えられる。19は高坏の受部の底部である。工具に

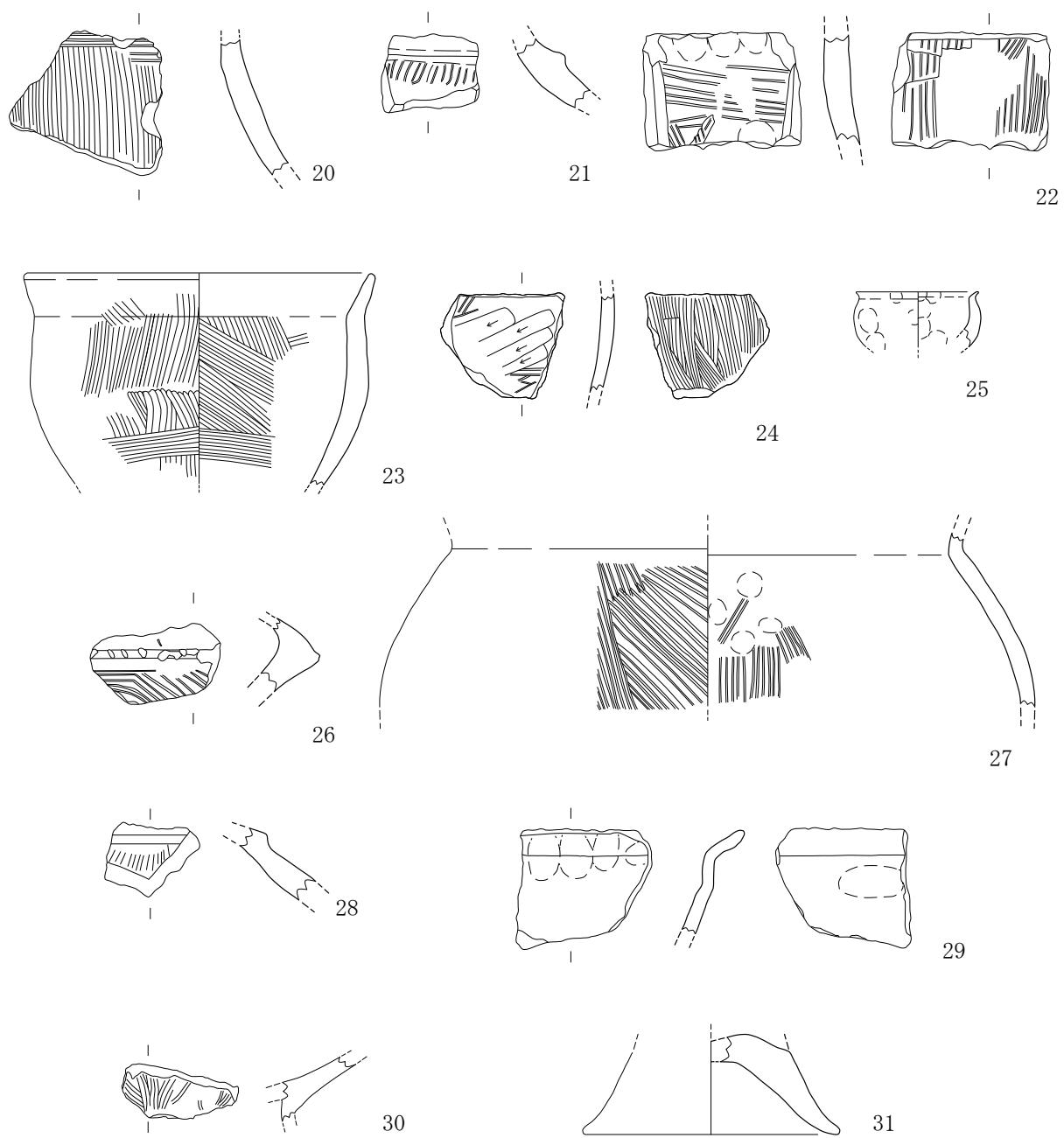


図 17 B 区包含層出土遺物

0 (1 : 3) 10cm

よるナデ調整によって器面を平滑に整えており、精巧な作りをしている。

20～31はB区の2層（黒褐色層）から出土した資料である。20は器台のくびれ部である。内外面にハケ調整を施し、外面には沈線もみられる。21は壺の肩部で、三角突帯を持つ。22は器台である。方形スカシの一部がみられる。23は鉢の口縁部から胴部にかけての資料である。直線的に伸びるくの字口縁で、端部は丸くおさめる。内外面にハケ調整を施す。24は甕か壺の胴部である。外面にハケ調整を、内面はハケのちへラケズリを施す。古墳時代の資料と考えられる。25はミニチュアの坏

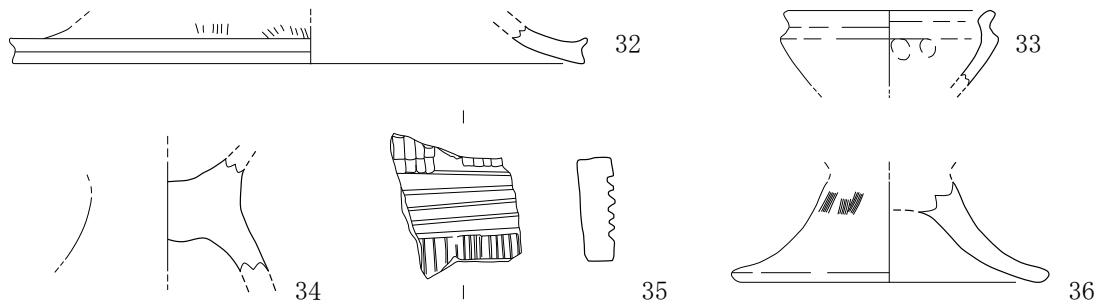


図18 かく乱・表土出土遺物

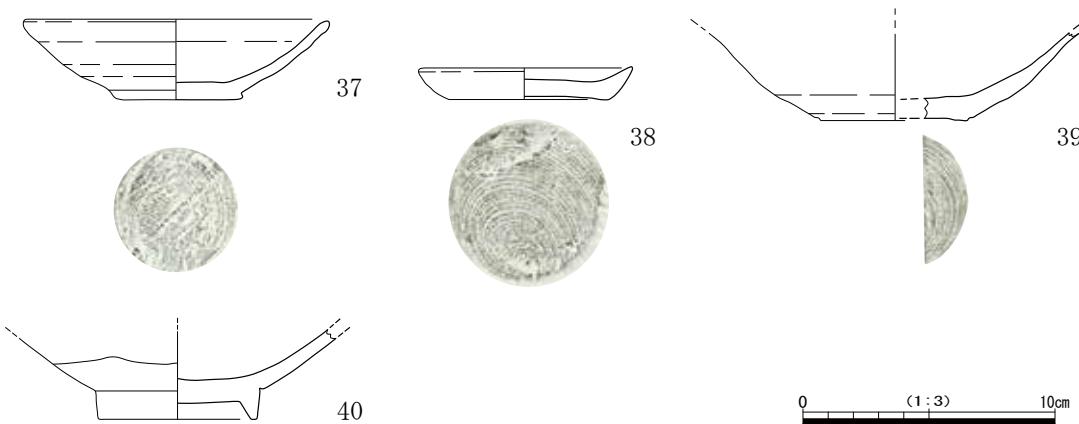


図19 出土土師器・陶磁器

である。くの字口縁で、内外面にユビオサエの跡がみられる。26は二重口縁壺の口縁部である。外側調整はハケ、内側調整はナデである。二重口縁の接合部にはキザミを施す。27は甕の口縁下から胴部の資料である。胴部は中位に向けて張り出しており、内外面にハケ調整を施している。28は壺の肩部で三角突帯を持つ。29は鉢の口縁部である。やや内湾気味に伸びるくの字口縁で、端部は丸くおさめる。ユビオサエの跡がみられ、器面が整えられておらず、粗雑な印象を受ける。30は高壺の受部である。外側にミガキ調整を施し、内側はナデ調整によって平滑に整えている。31は台付甕の脚台部である。台部は外反して開く。32～36はかく乱及び表土から出土した土器である。32は器台の裾部で、端部は凹部を形成している。33はミニチュアの壺で、口縁はS字状を呈す。34は台付甕の脚台部である。35は器台のくびれ部である。方形スカシの一部がみられ、5条の沈線を施している。36は台付甕の脚台部である。外反しながら長く伸びており、裾部が大きく開いている。

## (2) 中世の土師器

37～39は中世の土師器である。37はSK02から出土した土師器の壺である。底部に回転糸切りがみられる。口径に比して底径が小さい。38は土師器の小皿である。底径が6.4cmで、器高は1.2cmである。底部に回転糸切りがみられる。39は土師器の壺である。口縁がやや外反して伸びる。底部に回転糸切りがみられる。40は白器の碗で、見込みに釉を掻き取った跡が見られる。

### (3) 石鍋

いずれもかく乱からの出土である。41は石鍋の口縁部である。口縁は外方に向かって開き、鍔がなくなっている。16世紀以降の資料である。42は石鍋の口縁部である。短い鍔は不等辺台形をしており、14世紀の資料と考えられる。43は石鍋の口縁部である。縦耳が付くことから11世紀の資料である。44は石鍋の口縁部である。長く伸びる鍔が付く。45は石鍋の口縁部である。鍔が付く。44・45は口縁が内湾しながら伸び、縦長台形の鍔つくことから、12～13世紀の資料と考えられる。46は石鍋の底部である。

### (4) 石器類

47は腰岳系黒曜石を素材とする石鏸である。側縁が円弧を描く縦長の抉りの深い長い脚部を持つ凹基の石鏸で脚部の先端は尖る。裏面には主要剝離面を大きく残している。調整加工も器体中央までは届いておらず剥片鏸の可能性が高い。48は石鏸の脚部破片である。全体の形状は知りえないが幅広で浅い凹基になるものか。調整は丁寧である。49は主要剝離面側に顕著な擦痕を持つ使用痕のある剥片である。表面は礫面である。50～53は縦長剥片である。50はやや厚手の先細りのしっかりした

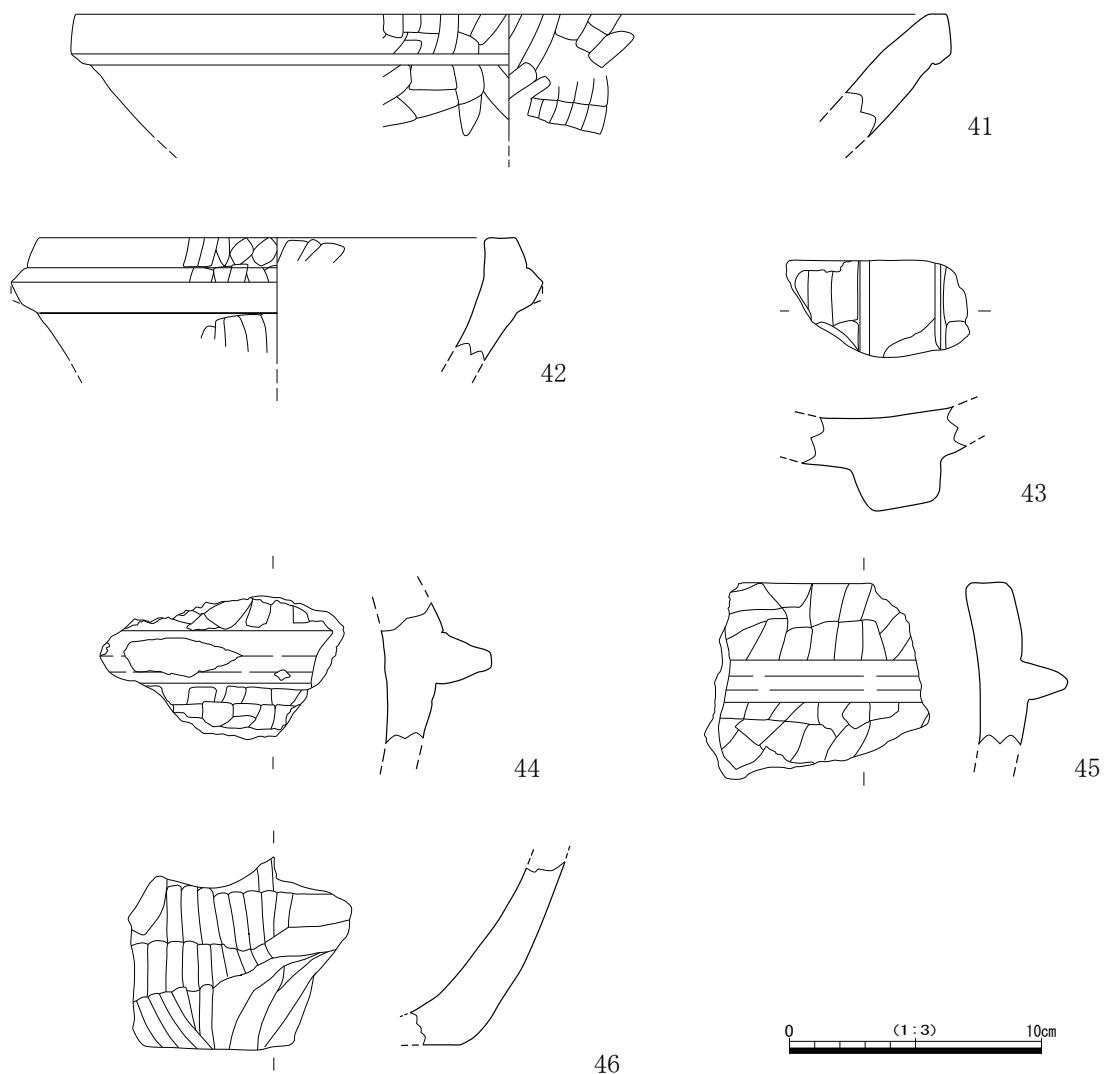


図20 出土石鍋

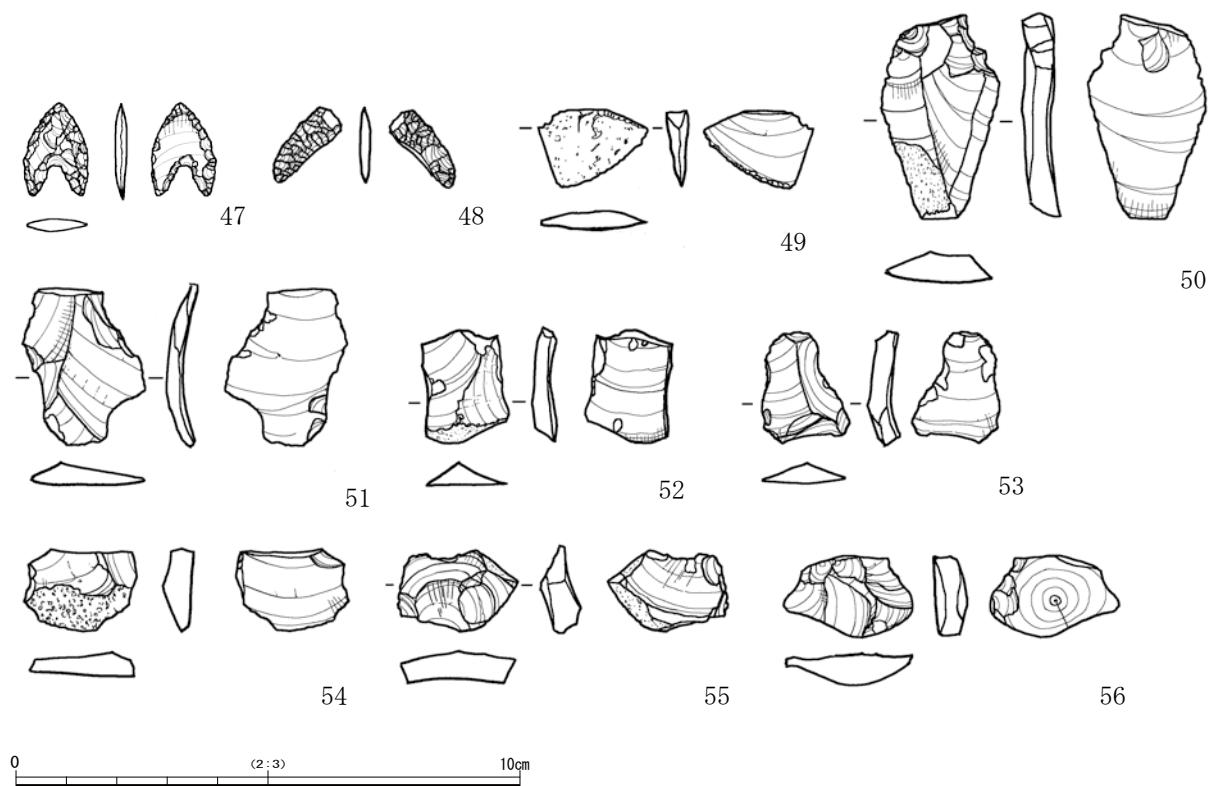


図 21 出土石器

つくりの剥片で、端部に礫面を残す。打面は平坦である。51は薄手のやや幅広になる剥片で、打点部を折損している。端部に礫面を残す。52は打点と左側縁を折損する剥片で、表面先端部に礫面を残す。二重パティナである。53は先端部が幅広になる剥片である。後世のガジリが全周に及んである。54は円礫の松浦系黒曜石を素材とする剥片である。大きく折損しており全体の形状は不明であるがパティナが発達しており縄文時代早期以前の可能性もある。55は厚手の不定形剥片である。礫面を残すとともに二重パティナも看取される。56は白斑の入る良質の黒曜石を素材とした不定形剥片である。主要剥離面は中央部を打点しており特異である。

(川道)



写真 10 遺物番号 49 拡大写真

## (5) 黒曜石の产地同定

今回の調査で出土した黒曜石石器類 20 点について、蛍光 X 線分析による产地同定をおこなった。

近年、長崎県埋蔵文化財センターでは、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置を用いて、原産地の黒曜石原石の分析を実施している。九州各地の原産地から採集した黒曜石原石を分析することで、判別図もより充実してきている。

分析を行った 20 点の資料について、その全てが腰岳系の黒曜石であることが判明した。

表 2 黒曜石产地同定分析表

資料番号	K	Mn	Fe	Rb	Sr	Y	Zr	Rb分率	$Mn \times 100/Fe$	Sr分率	$\log Fe/K$	原産地
KBT201704-501	66.535	26.82	639.04	344.20	105.22	141.19	233.15	41.78	4.20	12.77	0.98	腰岳系
KBT201704-502	65.2	28.43	693.36	333.63	100.10	133.65	222.81	42.22	4.10	12.67	1.03	腰岳系
KBT201704-503	64.39	25.10	610.77	322.86	97.89	133.02	220.80	41.68	4.11	12.64	0.98	腰岳系
KBT201704-504	69.602	27.31	651.58	336.56	101.82	138.16	227.64	41.85	4.19	12.66	0.97	腰岳系
KBT201704-505	63.422	24.48	587.96	330.15	89.31	133.47	216.00	42.94	4.16	11.62	0.97	腰岳系
KBT201704-506	62.992	21.83	560.80	310.35	94.32	128.32	224.95	40.95	3.89	12.44	0.95	腰岳系
KBT201704-507	59.48	22.75	554.22	301.69	93.14	125.22	217.13	40.93	4.10	12.64	0.97	腰岳系
KBT201704-508	64.936	26.27	601.73	326.62	97.87	131.68	222.40	41.95	4.37	12.57	0.97	腰岳系
KBT201704-509	64.134	24.73	599.11	312.84	91.55	125.88	211.00	42.20	4.13	12.35	0.97	腰岳系
KBT201704-510	67.914	26.91	639.26	342.99	104.22	139.66	229.20	42.03	4.21	12.77	0.97	腰岳系
KBT201704-511	61.344	24.10	581.19	312.50	94.01	130.23	216.56	41.48	4.15	12.48	0.98	腰岳系
KBT201704-512	54.768	21.52	519.13	300.95	88.90	128.27	212.78	41.17	4.15	12.16	0.98	腰岳系
KBT201704-513	70.144	27.44	641.13	342.37	104.32	138.04	227.40	42.16	4.28	12.84	0.96	腰岳系
KBT201704-514	65.483	24.19	597.70	327.93	98.77	134.17	223.10	41.83	4.05	12.60	0.96	腰岳系
KBT201704-515	64.135	24.41	568.04	314.21	95.53	129.59	215.17	41.64	4.30	12.66	0.95	腰岳系
KBT201704-516	59.276	23.57	559.76	307.17	92.86	129.50	209.93	41.54	4.21	12.56	0.98	腰岳系
KBT201704-517	59.642	22.82	544.33	300.43	92.01	126.78	211.67	41.10	4.19	12.59	0.96	腰岳系
KBT201704-518	65.564	22.65	550.07	311.12	92.11	125.10	209.78	42.15	4.12	12.48	0.92	腰岳系
KBT201704-519	66.473	24.86	642.16	324.96	99.45	134.51	223.28	41.54	3.87	12.71	0.98	腰岳系
KBT201704-520	59.865	22.66	555.22	306.15	95.33	129.15	220.87	40.74	4.08	12.68	0.97	腰岳系

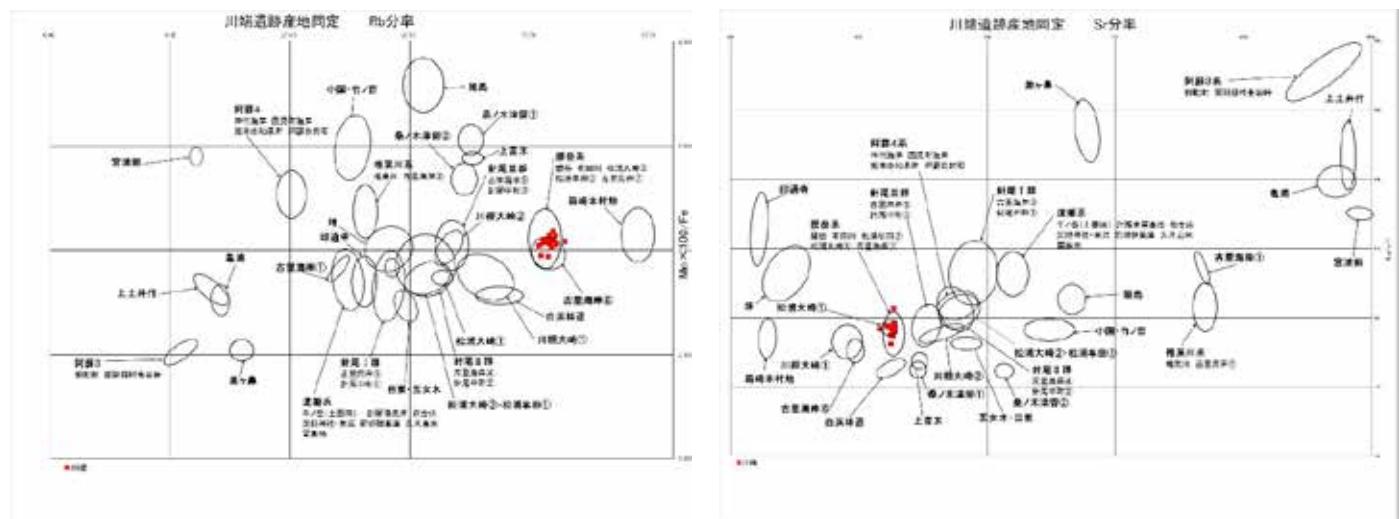


図 22 黒曜石产地同定判別図

### III. 本調査

表3 出土遺物一覧（弥生土器・古墳時代の土師器）

掲載番号	出土地点・層位	器種	部位	年代	法量(cm)			色調	胎土		調整		備考	
					口径	器高	底径		外	内	外	内		
1	7024	SP52	坏	口縁部	弥生後期	(6.6)	—	—	黄褐色2.5V5/4	にぶい黄褐色	金雲母・石英・長石	ハケーナデ	ハケーナデ	
2	7024	SP52	鉢	口縁～脚部	—	(8.6)	—	—	橙7YR7/6	橙7YR7/6	金雲母・黒雲母・微小な石英・赤色粒子・角閃石	ハケーナデ	ハケーナデ	
3	7024	SP52	甕	口縁部	弥生後期	(19.9)	—	—	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	長石・金雲母・赤色粒子	ハケーナデ	ハケーナデ	
4	7024	SP52	甕	口縁部	弥生後期	—	—	—	灰褐色10YR4/2	にぶい黄褐色	長石・金雲母・赤色粒子	ハケーナデ	ハケーナデ	
5	7024	SP53	甕	口縁～脚部	弥生後期	(12.2)	—	—	にぶい黄2.5YR3/3	黄褐色2.5Y4/1	長石・金雲母・黒雲母・赤色粒子	ハケーナデ	オサエ、ハケーナデ	
6	7024	SP54	甕	底部	弥生後期	—	—	4.4	明黄褐色	明黄褐色10YR6/6	石英・赤色粒子	ハケ	ハケ	
7	7125	SP40	台付甕	口縁～脚部	—	—	—	明黄褐色	にぶい黄褐色	長石・金雲母・赤色粒子	ハラナデ	ハラナデ		
8	7125	SP40	甕	口縁～脚部	弥生後期	20.0	—	—	暗褐色	黒褐色5Y5/2	長石・石英・金雲母・赤色粒子	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	
9	6923	SU01	甕	口縁部	弥生後期～古墳初頭	(23.2)	—	—	橙7YR6/6	明赤褐色5Y5/6	金雲母・長石・角閃石	ハケーナデ	ハケーナデ	
10	6923	SU02	台付甕	脚部	弥生後期～古墳初頭	—	—	(16.3)	にぶい黒褐色	黒褐色7.5YR5/4	金雲母・長石・角閃石	ハケ、ナデ	ナデ	
11	6623	2層	甕	口縁部	—	—	—	橙5YR6/6	橙5YR6/6	長石・石英・角閃石	ナデ	ナデ		
12	6721	2層	高坏	脚柱部	—	—	—	明黄褐色	にぶい黄褐色	長石・石英・赤色粒子	ナデ、ハケ	ナデ、ハケ		
13	6722	2層	台付甕	底部	弥生後期	—	—	—	黄褐色10YR5/6	褐色灰10YR4/1	金雲母・石英・角閃石・長石・赤色粒子	ハケーナデ	—	
14	6722	2層	坏	口縁～脚部	—	(8.6)	—	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	長石・石英・雲母・赤色粒子	ナデ	ナデ		
15	6923	2層	鉢	口縁部	—	—	—	にぶい黒褐色	にぶい澄	金雲母・角閃石	ナデ	ナデ		
16	6924	2層	鉢	口縁部	弥生後期	(14.4)	—	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	長石・金雲母・赤色粒子・石英・黒雲母	ハケーナデ	ハケーナデ		
17	7023	2層	壺	肩部	—	—	—	橙7YR6/6	橙5YR6/8	石英・雲母・赤色粒子・長石	ハケーナデ	—		
18	A区	2層	高坏	脚柱部	古墳前期	—	—	—	橙5YR6/6	橙5YR6/6	長石・金雲母	ナデ	ナデ	
19	A区	2層	高坏	受部	—	—	—	暗褐色7.5YR3/3	暗褐色7.5YR3/3	△2mmまでの長石を多く含む・角閃石	ナデ	ナデ		
20	7024	2層	器台	脚部	弥生後期	—	—	—	橙7.5YR6/6	橙7.5YR6/6	金雲母・赤色粒子・石英・長石	ハケ	ハケ、オサエ	沈録
21	7024	2層	壺	肩部	—	—	—	明黄褐色10YR7/6	黄褐色7.5YR7/8	赤色粒子・石英・ハケ、ナデ	ナデ	ナデ		
22	7124	2層	器台	脚部	弥生後期	—	—	—	明黄褐色10YR7/6	10YR7/6	金雲母・赤色粒子・石英	ハケ	ハケ、オサエ	
23	7124	2層	坏	口縁～脚部	弥生後期	(15.6)	—	—	黒褐色7.5YR3/1	橙7.5YR6/8	金雲母・長石・赤色粒子	ハケーナデ	ハケーナデ	
24	7124	2層	—	脚部	弥生後期	—	—	—	明黄褐色	暗黄褐色5Y5/2	雲母・長石	ハケ	ハケ	
25	7124	2層	坏	口縁～脚部	弥生後期	(5.4)	—	—	10YR6/4	10YR5/4	赤色粒子・角閃石	オサエ、ナデ	オサエ、ナデ	ミニチュア
26	7124	2層	壺	口縁部	弥生後期	—	—	—	10YR7/4	10YR6/3	五芒星・角閃石・赤色粒子	ナデ、キザミ	ナデ	
27	7124	2層	甕	脚部	弥生後期	—	—	—	10YR5/4	10YR5/4	長石・赤色粒子・黒雲母	ハケ、ナデ	オサエ、ナデ	
28	7124	2層	壺	肩部	弥生後期	—	—	—	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	長石・赤色粒子・黒雲母・赤英	ナデ、ハケ	ナデ	
29	7124	2層	鉢	口縁部	弥生後期	—	—	—	黒褐色7.5YR3/1	黒褐色7.5YR3/2	長石・金雲母・赤色粒子	オサエ、ナデ	オサエ、ナデ	
30	7124	2層	高杯	受部	弥生後期	—	—	—	黒褐色10YR5/1	にぶい黄褐色10YR5/4	長石・金雲母	ミガキ	ナデ	
31	B区	2層	台付甕	台部	弥生後期	—	—	(11.4)	黄褐色10YR5/8	明黄褐色10YR6/6	長石・角閃石	—	ナデ	
32	7224	かく乱	器台	脚部	弥生後期	—	—	(21.6)	橙5YR6/6	5YR6/6	長石・石英	ハケ、ナデ	ナデ	
33	7023	かく乱	坏	口縁部	弥生後期	(8.3)	—	—	明黄褐色10YR7/6	明黄褐色10YR7/6	金雲母・角閃石・赤色粒子	ナデ	オサエ→ナデ	ミニチュア
34	7123	かく乱	台付甕	底部～台部	弥生後期	—	—	—	橙7.5YR6/6	7.5YR5/4	明黄褐色10YR7/6	ナデ	ハケーナデ	
35	7123	かく乱	器台	ぐびれ部	弥生後期	—	—	—	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	長石・角閃石・石英・赤色粒子	ハケ	—	沈録(5条)
36	A区	表土	台付甕	台部	弥生後期	—	—	(12.6)	橙7.5YR7/6	7.5YR6/6	長石・角閃石・赤色粒子・石英	ハケ、ナデ	ナデ	

表4 出土遺物一覧（中世の土師器・磁器）

掲載番号	出土地点・層位	器種	部位	年代	法量(cm)			色調	胎土		調整		備考	
					口径	器高	底径		外	内	外	内		
37	7125	SK02	杯	口縁～底部	13C	12.1	3.2	4.9	浅黄色	3mm大さじでの赤色 粒子を多量に含む	回転コロナデ	底部糸引き		
38	6723	2層	小皿	口縁～底部	13C	8.6	1.3	6.5	明黄褐色10YR7/6	明黄褐色10YR7/6	長石・金雲母・角閃石・赤色粒子	回転コロナデ	底部糸引き	
39	7024	2層	杯	口縁～底部	13C	—	—	(5.6)	明黄褐色10YR6/6	10YR6/3	長石・角閃石・長石・赤色粒子	ナデ	オサエ→ナデ	ミニチュア
40	—	2層	白磁碗	脚部～底部	12C	—	—	—	赤色粒子・角閃石・石英	回転コロナデ	底部糸引き	細胞・内面見込み 繋き取り		

表5 出土遺物一覧（石鍋）

掲載番号	出土地点・層位	器種	部位	石材	調整			法量(cm/g)	備考				
					外側	内面	口径		外	内	外	内	
41	6722	かく乱	石鍋	口縁部	滑石	バケツリ	バケツリ	(34.6)	—	—	—	—	鋼無し
42	7224	かく乱	石鍋	口縁部	滑石	バケツリ	バケツリ	(19.0)	—	—	—	—	鍔付
43	7123	かく乱	石鍋	口縁部	滑石	バケツリ	バケツリ	—	—	—	—	—	縦耳
45	7124	かく乱	石鍋	口縁部	滑石	バケツリ	バケツリ	—	—	—	—	—	鍔付
46	7124	かく乱	石鍋	口縁部	滑石	バケツリ	バケツリ	—	—	—	—	—	鍔付
47	A区	かく乱	石鍋	底部	滑石	バケツリ	バケツリ	—	—	—	—	—	

表6 出土遺物一覧（石鍋）

掲載番号	遺構・層位	器種	石材	法量(cm/g)				備考		
				長さ	幅	厚さ	重さ	外	内	
47	7023	4層上面	石鏃	黒曜石	1.9	1.3	0.3	0.49	—	—
48	7024	2層	石鏃	黒曜石	1.8	0.8	0.3	0.28	—	—
49	7124	2層	剝片	黒曜石	1.5	2.1	0.5	0.9	—	使用痕あり
50	7123	2層上面	剝片	黒曜石	4.1	2.5	0.75	6.34	—	—
51	7123	かく乱	剝片	黒曜石	3.2	2.1	0.5	2.62	—	—
52	A区	かく乱	剝片	黒曜石	2.4	1.8	0.5	2.31	—	—
53	—	かく乱	剝片	黒曜石	2.3	1.62	0.6	1.71	—	—
54	7224	かく乱	剝片	黒曜石	1.7	2.25	0.6	2.53	—	—
55	A区	表土	剝片	黒曜石	2.35	1.65	0.7	2.58	—	—
56	6623	2層上面	剝片	黒曜石	1.65	2.7	0.7	2.89	—	—

## IV. 総括

今回の調査では、主に弥生時代後期の土器を中心とした遺物群が出土した。「台付甕」や「肥前型器台」といった在地の土器群を主体としているが、当該時期の明確な遺構は発見されず、ほぼ包含層からの出土であった。また、出土数は少ないが、12～13世紀頃の土師器や磁器も出土した。これらを包含する遺構埋土は、掘立柱建物跡を構成するピットの埋土と共通している。

掘立柱建物跡については、3層面検出段階で遺構として認定したが、遺構埋土と2層土が似ているために気づかず、本来は2層面から掘り込まれていた可能性もある。掘立柱建物を構成するピット内からの遺物の出土はなく、この建物跡の時期を特定することはできない。ただ、構成ピットの規模や埋土の状況などから、今回調査で出土している土師器・磁器類と同時期になるのではないかと推定している。前述のとおり、長軸は座標北から西に19～20度ほど振れており、竹松遺跡で確認されている建物跡群とは一致しない。

溝状遺構についてもその全体を把握することはできないが、遺構内から青磁片が出土していることから、中世以降に作られたものと考えられる。以上のことから、弥生時代後期を主体として古墳時代までの遺物を含む黒褐色の包含層に、古代～中世の遺構として掘立柱建物跡や溝状遺構が掘り込まれた状況が推定される。

九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う発掘調査や、都市計画道路池田沖田線改築工事に伴う発掘調査によって、大村地域の縄文時代から近世までの社会状況が明らかになってきている。川端遺跡においても弥生時代後期の在地系土器群や古代から中世の遺構・遺物が出土したことから、竹松遺跡を中心に広がる集落域に含まれる遺跡ではないかと考えられる。

### 【引用参考文献】

- 安樂哲史 2012『市内遺跡発掘調査概報5』（大村市文化財調査報告書 第24集）大村市教育委員会  
大野安生 安部憲毅 1992『坂口館跡』（大村市文化財調査報告書 第22集）大村市教育委員会  
大野安生 松川憲毅 2000『黒丸遺跡ほか発掘調査概報 Vol.2』（大村市文化財調査報告書 第24集）大村市教育委員会  
大村市史編纂委員会 2013『新編 大村市史』第1巻（自然・原始・古代編）大村市  
大村市史編纂委員会 2014『新編 大村市史』第2巻（中世編）大村市  
大村市文化財保護協会 1992『寿古遺跡』  
川畠敏則 中川潤次 中尾篤志 古門雅高 杉原敦史 浦田和彦 堀内和宏『竹松遺跡Ⅱ』（新幹線文化財調査事務所調査報告書 第5集）長崎県教育委員会  
木戸雅寿 1993「石鍋の生産と流通について」『中近世土器の基礎研究 9』中世時研究会  
久住猛雄 2017「福岡県（糸島・早良・福岡平野）」『九州島における古式土師器』九州前方後円墳研究会  
長崎県教育委員会 1997『原始・古代の長崎県 資料編Ⅱ』  
長崎県考古学会 九州考古学会 2015『有明海とその周辺をめぐる弥生時代の交流』  
中世土器研究会 1995『概説 中世の土器・陶磁器』  
堀内和宏 2017『今富城跡』（新幹線文化財調査事務所調査報告書 第9集）長崎県教育委員会  
古門雅高 2005「有明海西岸地域における弥生時代後期の土器」『西海考古 第6号』西海考古同人会  
柳田康雄 2002『九州弥生文化の研究』学生社



写真 11 表土掘削作業



写真 12 A 区人力精査状況



写真 13 B 区人力精査状況



写真 14 C 区人力精査状況



写真 15 B 区包含層検出状況

## 巻末図版 2



写真 16 SK01 検出状況



写真 17 SK01 板石材検出状況



写真 18 SD01 検出状況



写真 19 SD01 南北ベルト土層断面



写真 20 SK02 土師器杯検出状況



写真 21 土師器小皿検出状況



写真 22 SP40 遺物検出状況



写真 23 土器集中箇所検出状況



1



2



3



4



5



6



7



8

写真 24 遺物番号 1-8



9



10



11



12



13



14



15



16

写真 25 遺物番号 9-16



17



18



19



20



21



22



23



24

写真 26 遺物番号 17-24



25



26



27



28



29



30



31



32

写真 27 遺物番号 25-32



33



34



35



36



37



38



39



40

写真 28 遺物番号 33-40



写真 29 出土石銅群



写真 30 出土石器群

# 報 告 書 抄 錄

ふりがな	かわばたいせき							
書名	川端遺跡							
副書名	都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次	IV							
シリーズ名	長崎県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第26集							
編著者名	宮木貴史(編)・川道寛							
編集機関	長崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒811-5322 長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触 515 番地1 電話 0920 (45) 4080							
発行年月日	西暦 2018年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査 期間	調査 面積	調査原因
かわばたいせき 川端遺跡	ながさきけん 長崎県 おおむらし 大村市 おにはしちょう 鬼橋町	市町村 42205	遺跡番号 77-99	32° 56' 52"	129° 57' 6"	2017.06.02 ～ 2017.10.25	1,943 m <sup>2</sup>	道路
収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
川端遺跡	遺物包含地	弥生時代 古墳時代 中世	掘立柱建物跡 溝状遺構 土坑(石棺墓か)	弥生土器 土師器 陶磁器類 石鎧 石鍋				

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第26集  
川端遺跡  
2018（平成30）年3月31日  
発行 長崎県教育委員会  
長崎市尾上町3番1号  
印刷 株式会社 昭和堂